

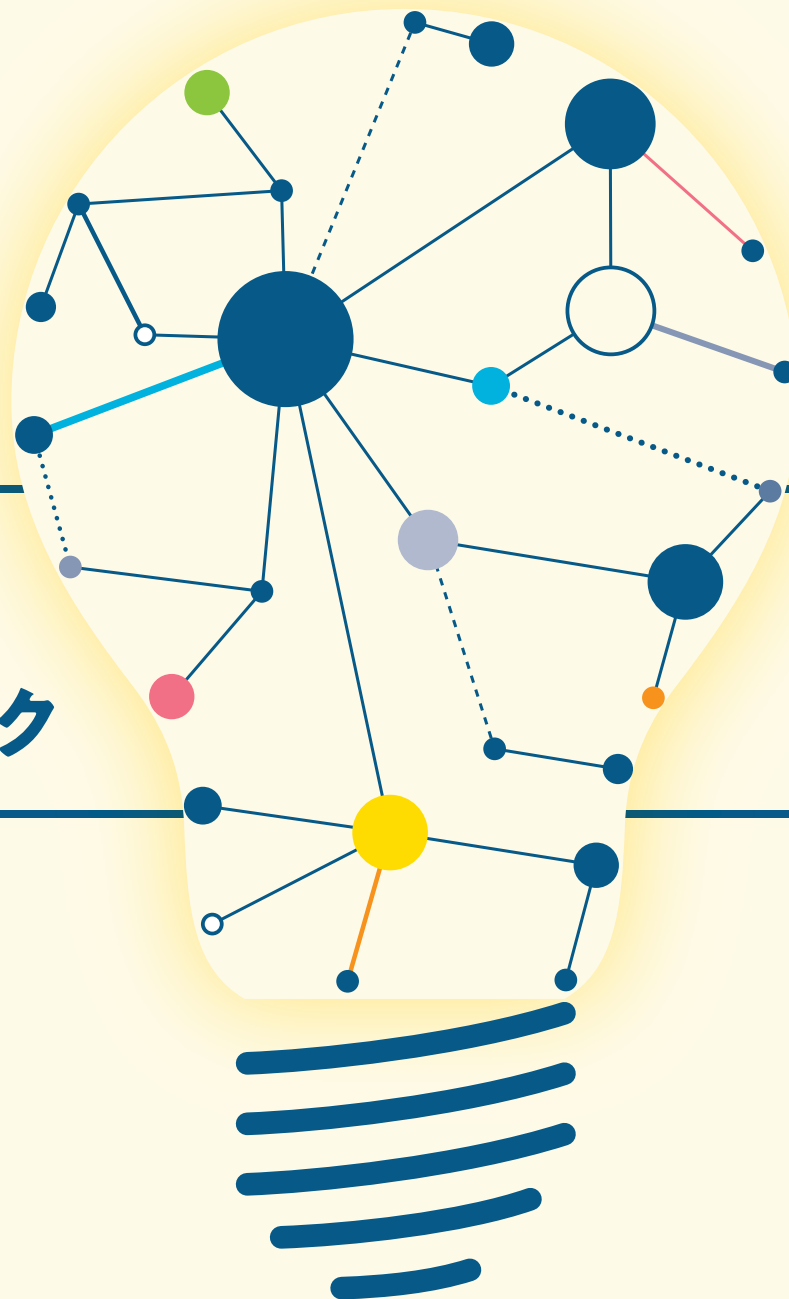
令和3年度 厚生労働省
老人保健健康増進等事業

事例でわかる

地域アセット 活用ガイドブック

生活支援コーディネーターの
居場所づくり・
つながりづくりを応援

新型コロナウイルス影響下における
生活支援体制整備事業の推進に向けた
人材育成に関する調査研究事業



はじめに

2年間にわたる世界的な新型コロナウイルスの流行で、地域の居場所活動は休止や活動内容の見直しなど大きな変化がありました。人との交流を避ける行動様式が広く浸透して、集まる活動そのものがやりにくくなっている一方で、外出機会や人との接触が減ったことによる高齢者の健康への影響が懸念され、身近なところで参加できる地域の居場所の再開に向けた支援や、新たな活動の開発が求められています。

このガイドブックは、地域の居場所活動に関わっている、あるいは活動を立ち上げたいと考えている生活支援コーディネーターの皆さんが、「アセット重視」の視点で地域資源を発見し、居場所活動に活用することができるようになることをねらいとしています。

コロナ禍のなかでも様々な工夫やアイデアで活動を継続し、新たな取り組みを生み出している事例を参考にいただき、柔軟な発想で「あるもの」「強み」を活かす、関係者のチームづくりと開発・展開の構想づくりに役立てていただければ幸いです。

目次

はじめに	01
生活支援コーディネーターによるアセットの活用イメージ	04
アセット重視の考え方	06
居場所の特徴分類と基本情報一覧	08
●事例紹介	10
01 すまいる向陽台 東京都稲城市向陽台 第2層協議体が文化センターの喫茶室で運営する「住民同士が顔見知りになる居場所」	11
02 かふえまんでサロン 香川県高松市香南町横井 女性の地域リーダーの力を結集してできた、福祉相談もできてコーヒーが美味しい「かふえ」	15
03 喫茶わくわく 大阪府泉南郡岬町淡輪 "旧村"の強いつながりから生まれた、朝から集まれるみんなの居場所	19
04 やまもりいこいの家 愛知県知多市岡田 福祉NPOの経験が生きる、週5日通える高齢者の居場所	23
05 カフェいしださんち 東京都稲城市平尾 NPO元代表が自宅の居間にひらいた地域の居場所	27
06 ゆずり葉 東京都板橋区高島平 昼間は福祉サロン、夜は居酒屋。一日中人を集める地域の居場所	31
07 こうせい親子（おやじ）食堂 大阪府大阪市港区港晴 男性スタッフが活躍する、参加者が高齢者:子ども=6:4の多世代食堂	35
08 ふれあい食堂 鳥取県鳥取市河原町渡一木 「地域の常夜灯になる」地域共生社会をめざす地域食堂	39
09 畑活プロジェクト「はっぴい農園」 奈良県葛城市笛吹 コロナ禍でも密にならない活動を探して実現「畑活プロジェクト」	43
10 参考事例 高松第三行政区ふるさと地域協議会 岩手県花巻市高松 「事例から発想しよう！我が町アセット活用のヒント」一覧	47
●やってみよう！アセット発見で、居場所の「やりたい！」をかなえるワーク	52
ワークシート	58
ワークショップを「創造的」にすすめるために	62
委員名簿	63

生活支援コーディネーターによるアセット活用イメージ

多くの地域では、地域資源マップづくりなどをおして「地域資源」が整理されていますが、この冊子で使う「アセット」(地域の「資産」「財産」)は「地域資源」よりも領域の広い概念です。

「アセット活用」とは、すでに地域にある様々な資産や活動などをうまく使ったり盛り立てたりして、活用していこうという意味です。

どんな地域にもじつはすでに様々なアセットがあります。

住民個人が持っている「こんなことをやってみたい」という情熱、仕事や趣味の経験をはじめ、人同士の交流やつながり、福祉関係に限らない地域にある様々な活動、産業、拠点やモノ、情報に関する事など地域にはまだまだ活用されていないアセットが眠っています。

今、各地の「居場所」で様々な地域の支え合い活動が展開されています。

気軽に参加できる場があることで、人が集まり、「こんなことをやってみたい」や「小さな困りごと」を共有して、生きがいや課題解決のための新しい活動を生み出しています。

生活支援コーディネーター(SC)が、「新しい居場所、新しい活動」をゼロから立ち上げるのは簡単なことではありません。しかし「元々あったアセット」を見つけ、見守り、活用することで、新たな価値が生み出されると考えると、身近なものから考えれば良いとわかって少し気が楽になります。

アセットは地域での対話や関わりによって力を発揮します。元々あったアセットがその価値を活かすには、アセットを組み合わせたり、つなげたりするSCの関わりが欠かせません。また、協議体メンバー・地域住民・市町村・社協・地域包括担当者など、地域で連携してすすめていく多様な立場の人のチームづくりも大切なポイントです。

**住民自身の意欲や経験、地域の人脈、場所やモノ・情報などの「アセット」が
どのように居場所づくりに活用されているか、掲載事例の中からいくつかあげてみます。**

**アセット▶ コーヒーやトーストにはこだわりたい！
という人がいます。**

活用の例▶「こだわりのある人」と「居場所づくり」が
つながることで、公共施設での開催にも拘わらず「お
しゃれして出かけたい」カフェができました。

(事例03 かふえまんでサロン)

**アセット▶ 社協が運営する就労継続支援B型
事業所の喫茶店があります。**

活用の例▶「公共施設内にある喫茶店」と「居場所」が
つながることで、誰でも来やすい場所で、飲食準備の
手間が省ける居場所運営ができるようになりました。

(事例01 すまいる向陽台)

**アセット▶ 同じ場所で、夜は居酒屋、昼間は
地域サロンを開設する店があります。**

活用の例▶「居酒屋のお客さんもサロン参加者も」ど
ちらも福祉につながる地域の居場所になりました。

(事例06 ゆずり葉)

**アセット▶ 通所介護事業所オーナーが所有する
使われていない畑があります。**

活用の例▶「コロナ禍でもできる活動」のアイデアが
「畑」とつながることで、コロナ禍でも集まれる拠点
ができました。

(事例09 畑活プロジェクト「はっぴい農園」)

**アセット▶ 商店街で使える
クーポンチケットがあります。**

活用の例▶「クーポン」を「居場所の利用」にもつなげ
ることで、地域の高齢者が居場所を訪れるきっかけを
つくりました。

(事例04 やまもりいこいの家)

**アセット▶ 男性の仲間がスポーツチームを
組んでいます。**

活用の例▶「スポーツチームメンバー」と「多世代食
堂」をつなげることで、メンバーがそのまま「地域食堂
の男性ボランティア」として大活躍しています。

(事例07 こうせい親子食堂)

本ガイドブックでは、左ページのようなアセット活用について、
〈3つのアセットにフォーカス〉して紹介しています。

「元々あったアセット」

居場所の立ち上げや展開の「カギとなるアセット」です。



3つのアセットに フォーカス

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

担い手に
なったのは

退職後の男性

自らも楽しみながら「す
まいる向陽台」の運営者

・地域の特長として、同世代の人が多く住むニュータウンのしがらみの少ない自由さがあり、これまでも交流やまちづくりのための住民手づくりのまつりやイベントが活発に行われてきました。

・「地元のために何かしたい」と地域活動への参加を考える人も増えています。岩崎さん、

藤井さんも、個人として夫婦で第2層の協議体に参加しました。

・「すまいる向陽台」の居場所運営の中心は男性陣。仕事で培ったスキルも活かして、映画会や料理を楽しむ会などの楽しい企画づくりや広報活動も充実しています。

事例から発想しよう！ 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

みんな発想から考えよう！

**目的と作業内容を
明確にすることで
関わりやすくなる
人もいる**

・地域活動の担い手は女性が多く男性が入りにくい、また、男性は目的がないと参加しにくいという話を聞きます。

・ビジネスマン時代に培ったスキルを活かしたり、趣味の活動を発表できる場をつくるなど、関わり方を明確にすることも、男性が関わりやすくなる工夫のひとつです。

会場として
活用したのは

・「喫茶陽だまり」は、就労継続支援B型事業所として、障害のある人が接客やフッキー

・「すまいる向陽台」はこの「喫茶陽だまり」を使っています。参加者はそれぞれ飲み物な

「新たに生まれたアセット」

他のアセットをつなげたり組み合わせたりして活用することで、元々あったアセットに新たな価値が生まれました。

「元々あったアセット」から、「新たに生まれたアセット」がどのように生まれたかを紹介しています。

居場所と連携相談窓口として
活用したのは

**協議体メンバーが
運営する薬局・NPO**

気軽な相談の窓口

・協議体代表の平田さんは助け合い活動や介護事業などを行うNPOの設立者。子どもから高齢者、障害者まで幅広い対象者への支援事業の経験があります。

・さらに事務長の江口さんは、街開きの頃からある調剤薬局の薬剤師。顔の見える関係づくりができていた地元の薬局は、病気や

健康のこと以外にも、まちづくりの困りごとの相談をつけることもあります。

・居場所や普段の様子からキャッチした困りごとをSCや地域包括支援センターにつなげ、協議体でみんなの課題として共有する体制ができています。

みんな発想から考えよう！

紹介したアセット活用の事例を「いいな、やってみたいな」と思っても、全く同じアセットを我が町で見つけれたり活かしたりするのは難しい場合もあるでしょう。

そこで、どんな発想を持つとこの事例のようなアセットが生まれるのか、我が町でも活用できるような「ヒント」を掲載しました。

商店街との
「つなぎ」も有効

私がうまくできない」等、日常的に接しているお客さんの変化にいち早く気づくこともあります。

巻末では、居場所づくりや展開の構想をチームで考えるワークショップのやり方をご提案しています。ぜひご活用ください。

アセット重視の考え方

アセット重視の考え方は、健康・福祉の分野で、専門家主導に対する反省と、住民の力への着目から生まれてきたものです。

専門家主導の考え方では、「ないもの」（弱み、できないこと）が焦点となります。とりわけ、急を要し、重大なものが優先されます。病気や身体・認知機能が低下した、またそのおそれがあると判断される場合に、必要なサービスが提供されます。これは、問題を抱えた人に的を絞って、サービスやお金などの資源を集中的に投入するという手法です。必要の有無や大小について判断を行うのは専門家です。

専門家主導の考え方が想定する住民像は、サービスの受け手です。住民は消費者の立場に置かれ、主体的な参加の度合いは低くなります。また、取り組みの時間幅は、問題が解消されるまでの期間に限られます。さらに、サービスを評価する際には、客観性が重視されます。「なぜ病気になるのか?」、そして「いかにして素早く治療するか?」が、専門家主導の考え方の基本的な問いです。

これにたいして、アセット重視の考え方は、「あるもの」（強み、できること）に目を向けます。アセットは次のように定義されます。「個人、家族、コミュニティが自由に使える集合的な資源であり、健康に対するマイナスの影響から人々を保護し、健康・福祉を向上させ、生きる上での選択肢を拡大させるもの」*1。

この意味でのアセットは、物やお金に限定されません。誇り、熱意、自信、有意味感、目的、楽観性、首尾一貫感覚といった心理的な資源や、知識、経験、技能、社会関係資本といった社会的な資源も、大切な構成要素です。そして、アセットが集合的な資源であるという点も見逃せません。それらは、隣人や

友人との「つながり」（関係性）のなかに蓄えられることによって、力を発揮します。

アセット重視の考え方の前提には、住民自身が、健康・福祉を維持・向上するための力を持っているという見方があります。想定される住民像は、サービスの受け手や消費者というより、共同で問題の解決をはかる仲間（共同生産者）です。住民参加の度合いは高く、専門家が関わりつつ、住民が主体となって進める場面が多くなります。「なぜ健康になるのか?」、そして「いかにして長く健康を保つか?」こそが、アセット重視の考え方の基本的な問いです。

アセット重視の考え方は、専門家主導の考え方とは対照的です（表1参照）。ただし、両者は対立するものではありません。それらが、いわば車の両輪のように相互に補完しあうことで、社会の健康・福祉が向上するといえます。

表1 専門家主導とアセット重視

	専門家主導	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか?」	「なぜ健康になるのか?」

アセット重視の考え方では、コミュニティに根ざすことや、コミュニティが主導的な役割を担うことが期待されます。ただし、これはすべてを住民まかせにするということではありません。公的機関には、条件を整えるという

重要な役割があります（表2参照）。住民自身がすでに有益な活動を行っていることを認識し、住民が重視している価値や、住民が生きている物語を共感的に理解することが、その第一歩です。

表2 アセット重視の考え方にもとづく公的機関の役割*2

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none">①健康の向上に資するコミュニティのアセットを明らかにし、わかりやすく示す。②住民を、サービスの受け手ではなく、健康・福祉の共同生産者とみなす。③住民が何に取り組んでおり、何を大切にしているかを知ることから始める。住民「に向けて」ではなく、住民「とともに」活動する。④個人およびコミュニティのアセットと強みを明らかにし、それらに重点を置きながら、人生における持続可能な改善を行うようサポートする。⑤困難から立ち直る力、関係性、知識、誇りを向上することにより、住民がより良い方向への変化を起こせるようにサポートする。 | <ul style="list-style-type: none">⑥相互にサポートしあうネットワークづくり、友人関係づくりをサポートする。こうしたネットワークがあることで、住民は自らの環境をよりよく理解し、自分の生活をコントロールできるようになる。⑦その地域でうまくいっていることの価値を認める。⑧健康・福祉の向上に役立っている潜在的な要因を明らかにする。⑨コミュニティに権限を委譲し、コミュニティが、自らの将来を自分たちで決め、サービス、資金、建物といった具体的な資源を創出できるようにする。 |
|--|---|

アセット重視の考え方は、もともと欧州で提唱されました。しかし、アセットという言葉そのものは使われなくとも、共通する考え方にもとづく実践や支援が、すでに各地でひろがりつつあります。皆さんの身近なところにも、その兆しや種を見つけることができるはずです。

*1 Garven, F., J. McLean and L. Pattoni, 2016, Asset-Based Approaches: Their rise, role and reality, Dunedin Academic Press, p.29.

*2 同書, pp.35-36

「ここがあるので地域が豊かになる 住民主体の居場所ガイドブック」
(令和2年度厚生労働省老人保健健康増進等事業成果物) より再掲

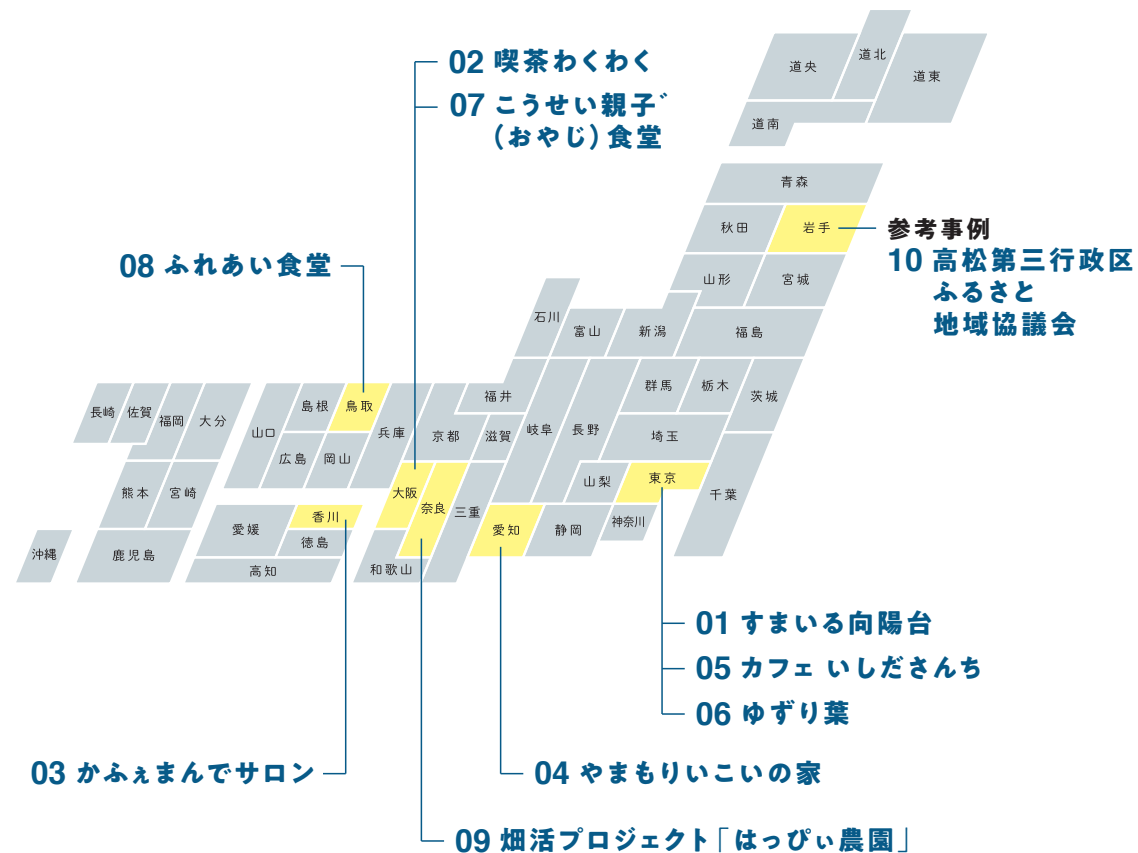
祐成 保志
東京大学大学院人文社会系研究科

居場所の特徴分類と、基本情報一覧

No	居場所の特徴		居場所の名称	居場所の所在地	主な活動圏域	運営団体の名称
01	高齢者向け サロン	公共施設	すまいる向陽台	東京都稲城市向陽台	向陽台地区	支え合いネットワーク向陽台 (第2層協議体)
02			かふえまんでサロン	香川県高松市香南町横井	香南地区	まんでサロン香南
03		空き店舗	喫茶わくわく	大阪府泉南郡岬町淡輪	淡輪6区	わくわく会
04			やまもりいこいの家	愛知県知多市岡田	岡田一区	やまもりいこいの家
05		自宅	カフェいしださんち	東京都稲城市平尾	美望会	NPO法人支え合う会みのり
06		飲食店	ゆずり葉	東京都板橋区高島平	高島平地区	NPO法人ゆずり葉
07	多世代型 地域食堂	公共施設	こうせい親子(おやじ)食堂	大阪府大阪市港区港晴	港晴地区	港晴地域活動協議会有志
08			ふれあい食堂	鳥取県鳥取市河原町渡一木	河原地区	河原共助会
09	畑作業で交流	畑	畑活プロジェクト	奈良県葛城市笛吹	新庄中学校区	新庄セブンつながりレンジャー (第2層協議体)
10			参考事例 高松第三行政区ふるさと地域協議会	岩手県花巻市高松	高松第三行政区	高松第三行政区 ふるさと地域協議会

拠点の性質	取り組み内容	関わりがある生活支援コーディネーター	
		担当者	所属
公共施設 (コミュニティセンターの喫茶店)	サロン活動(テーブルゲーム、おしゃべりなど)、 イベント	向陽台・長峰・ 若葉台地区第2層SC	地域包括支援センターこうようだい (運営:株式会社アースサポート)
公共施設 (地域保健活動センター)	モーニングサービス、相談支援	香南地区担当第2層SC	高松市社会福祉協議会
空き店舗(元整骨院)	ラジオ体操、モーニングサービス、 みまわり隊、買い物支援	岬町第1層SC(1層2層兼任)	岬町社会福祉協議会
空き店舗(元酒屋)	サロン活動、健康体操、音楽鑑賞会、 DVD鑑賞会、脳トレ、工作、誕生日会	知多ブロック第2層SC	NPO法人あゆみ
自宅開放	サロン活動(ゲーム、歌唱、ワンコインランチ、勉強会など)、 お一人様食事会	坂浜・平尾地区第2層SC	地域包括支援センターひらお (運営:社会福祉法人平尾会)
居酒屋	サロン活動、健康体操、認知症カフェ、ランチ、イベント	志村ブロック第1層SC 高島平地区第2層SC	第1層 板橋区社会福祉協議会 第2層 高島平地区第2層協議体
公共施設(老人憩の家)	子ども食堂、地域食堂、遊びのプログラム(子ども向け)	港区第1層SC	大阪市港区社会福祉協議会
公共施設 (人権福祉センター講堂)	子ども食堂、地域食堂、 学習や遊びのプログラム(子ども向け)	河原地区第2層SC	鳥取市社会福祉協議会
畑(耕作放棄地)	ラジオ体操、野菜や花の植え付け・栽培・収穫、イベント	葛城市第1層SC、 新庄中学校区第2層SC	葛城市社会福祉協議会
遊休農地	ナツハゼ・ガマズミ畑での栽培管理、交流イベント	—	—

事例紹介。



01

すまいる向陽台

高齢者向けサロン

東京都稲城市向陽台

第2層協議体が文化センターの喫茶室で運営する「住民同士が顔見知りになる居場所」



基本情報

名称 すまいる向陽台

所在地 東京都稲城市向陽台6-7
城山文化センター1階

東京都稲城市 ※2022年2月住民基本台帳より
人口:93,003人 総世帯数:41,935世帯
面積:17.97km² 人口密度:5,175.4人/km²
高齢化率:21.9%

開催日時 第2・第4火 15:00~17:00

運営主体 支え合いネットワーク向陽台(第2層協議体)

開所日 2017年2月

稲城市向陽台地区 ※2022年2月住民基本台帳より
人口:8,869人 総世帯数:3,655
面積:0.94km² 人口密度:9,435.1人/km²
高齢化率:27.5%

こんな居場所

〔地域〕 街開き当初の転入者が退職する時期になった多摩ニュータウン

向陽台は、稲城市の北部に位置し、1988年多摩ニュータウン稲城エリアの中で最初に街開きをしたまちです。丘陵地の地形を活かした景観が美しく、また文化・スポーツ施設や自然林散策路なども整備されています。

街開き当初に転入した世代は現在退職を迎え、その子ども世代が転出する中で、急速に高齢化が進んでいることに大きな危機感を感じるようになりました。転入者が多いため、古いがらみがなく言いたい事が言えるオープンさがあり、企業を退職した男性陣が活躍しやすい環境があります。一方、古くからの顔なじみがおらず、学校の同窓会などのネットワークもない環境です。どうやって支えあい活動を展開していったらいいかを話し合う中、まずはふらりと立ち寄れる居場所をつくって顔見知りを増やしていこうと、2017年、文化センターの喫茶「陽だまり」を借りて「すまいる向陽台」をオープンしました。

〔居場所の様子〕 城山文化センター1階にあるカフェで、居場所実施

城山文化センターは、向陽台地区の中心地にある公民館と児童館の複合施設です。「喫茶陽だまり」は文化センター1階のロビーにある喫茶コーナーで、名前のとおり窓から陽が差し込む明るく暖かい空間です。「陽だまり」は障害ある人の就労支援の場として、社会福祉協議会が運営しています。

第2・4火曜日の午後3時~5時まで、この場所を使って「すまいる向陽台」は開催されます。喫茶店のメニューから注文をして、それぞれ自由に過ごします。ときには丸テーブルを囲んでカードゲームを楽しんだり、視聴覚室や調理室では、地元稲城ゆかりの映画を観る会や作って食べる活動もあります。運営者も参加者も、男性陣が多いのがここの特徴です。

こうしてゆるやかに顔見知りを増やしながら、地域で支えあう関係を築いています。

居場所運営団体の性質	NPO法人
	任意団体
	第2層協議体

拠点の性質	公共施設
	店舗／空き店舗
	自宅
	畑

生活支援コーディネーターの所属	第1層
	市役所
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	第2層
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	住民



「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

地域での助け合いをするためには、住民同士が顔見知りになる居場所が必要！を実現した取り組みについて、アセットの活用に注目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

- ・1980年代に街開きしたニュータウン向陽台は一気に高齢化が進み、まもなく市内で一番高齢化率が高いエリアになると言われています。危機感をもち、このまま手をこまねてはいけな、と考える住民は少なくありませんでした。
- ・向陽台地区第2層協議体「支え合いネットワーク向陽台」メンバーは、住民の助け合いの体制づくりのために、まず住民同士が顔見知りになる機会をつくろうと考えました。

主な関係者

- 住** 協議体「支え合いネットワーク向陽台」代表 平田さん
・NPO「ふれあい広場ポーポーの木」設立者。広い地域ネットワークをもち、子どもから高齢者、障害者まで幅広い対象者への支援事業の知見がある。
- 住** 協議体「支え合いネットワーク向陽台」事務長 江口さん
・地元薬局を経営する薬剤師。健康や暮らしの困りごとの相談を受けることが多く、専門機関につなげる役割も担う。
- 住** 「すまいる向陽台」代表 岩崎さん
・2000年代に転入、退職後からマンションの理事や会報誌の作成、配食ボランティアなどの地域活動を始める。支え合いネットワーク向陽台に参加し、「すまいる向陽台」運営代表。
- 住** 「すまいる向陽台」副代表 藤井さん
・街開き時に転入、向陽台体育振興会の初代会長。長く地域のスポーツイベントやまつりに関わり、現在地区連合会の役員を務めている。「すまいる向陽台」副代表。
- SC** 第2層SC 谷地中さん
・地域包括支援センターこうようだい3年目、第2層SC活動歴1年目。
・20代はアパレル関係で百貨店に10年間勤務、30代半ばでケアマネジャー資格を取得。現在、向陽台・長峰・若葉台圏域を担当。

カギとなるアセット

人
○運営者 ・第2層協議体支え合いネットワーク向陽台 (構成:向陽台地区連合会、社会福祉協議会、民生・児童委員、向寿会(老人会)、★NPO法人ポーポーの木、NPO法人支え合う会みのり、NPO法人市民活動サポートセンターいなぎ) ★退職後の男性
場
○活動拠点 ★城山文化センターの「喫茶陽だまり」 (就労継続支援B型事業所、市社協が運営) ・城山文化センター内視聴覚室、調理室
モノ・資金
○補助金 ・稲城市地域介護予防活動支援事業「通いの場支援補助金」(講師料・会場費・広報費・コーディネーター費・感染予防対策費が対象。それぞれに補助額/上限額あり) ○居場所の飲食 ・喫茶陽だまりのメニュー(カレーライスなどの軽食やスイーツ、コーヒーなどの提供、福祉工房で作る焼き菓子や地元野菜の販売)
情報・ネットワーク
○地域全般の人・活動に関する情報 ・すまいるネット(支え合いネットワーク向陽台が行う有償の助け合い活動) ・すまいる通信(支え合いネットワークの機関紙。回覧板で配布したり掲示板に掲示) ・NPO法人市民活動サポートセンターいなぎ ★向陽台薬局(事務長の江口さんが経営する調剤薬局) ○高齢者の情報と利用紹介 ・地域包括支援センターこうようだい ・すまいる通信 ○地域のつながり ・市民まつり

3つのアセットにフォーカス

人
担い手に なったのは 元々あったアセット 退職後の男性 新たに生まれたアセット 自らも楽しみながら「すまいる向陽台」の運営者
場
会場として 活用したのは 元々あったアセット 社協が運営する就労継続支援B型事業所の喫茶室 新たに生まれたアセット 人が集まりやすく運営の手間がかからない活動拠点
情報・ネットワーク
居場所と連携相談窓口として 活用したのは 元々あったアセット 協議体メンバーが運営する薬局・NPO 新たに生まれたアセット 気軽な相談の窓口

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

- ・地域の特長として、同世代の人が多く住むニュータウンのしがらみの少ない自由さがあり、これまでも交流やまちづくりのための住民手づくりのまつりやイベントが活発に行われてきました。
- ・「地元のために何かしたい」と地域活動への参加を考える人も増えています。岩崎さん、

藤井さんも、個人として夫婦で第2層の協議体に参加しました。

- ・「すまいる向陽台」の居場所運営の中心は男性陣。仕事で培ったスキルも活かして、映画会や料理を楽しむ会などの楽しい企画づくりや広報活動も充実しています。

- ・「喫茶陽だまり」は、就労継続支援B型事業所として、障害のある人が接客やクッキーの製造販売、地元野菜の販売を行っています。軽食やカフェメニューも充実しています。

- ・「すまいる向陽台」は、この「喫茶陽だまり」を使っています。参加者はそれぞれ飲み物などを注文し、代金を支払います。「すまいる向陽台」メンバーの役割は話し相手やプログラム運営。食べ物飲み物の提供は「陽だまり」側が行います。

- ・協議体代表の平田さんは助け合い活動や介護事業などを行うNPOの設立者。子どもから高齢者、障害者まで幅広い対象者への支援事業の経験があります。
- ・さらに事務長の江口さんは、街開きの頃からある調剤薬局の薬剤師。顔の見える関係づくりができている地元の薬局は、病気や

健康のこと以外にも、ちょっとした困りごとの相談を受けることもあります。

- ・居場所や普段の様子からキャッチした困りごとをSCや地域包括支援センターにつなげ、協議体でみんなの課題として共有する体制ができています。

事例から発想しよう！ 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう！

**目的と作業内容を
明確にすることで
関わりやすくなる
人もいる**

- ・地域活動の担い手は女性が多く男性が入りにくい、また、男性は目的がないと参加しにくいという話を聞きます。
- ・ビジネスマン時代に培ったスキルを活かしたり、趣味の活動を発表できる場をつくるなど、関わり方を明確にすることも、男性が関わりやすくなる工夫のひとつです。

こんな発想から考えよう！

**すでにある
資源の活用を
考える**

- ・喫茶店を居場所として活用する事例は、ありそうであり多くはありません。
- ・飲食に関することは全て喫茶店にお任せすることで、運営のハードルはぐっと下がります。
- ・自分たちでなんでもやろうと背負わずに、「あるものを活用できないか」と考える視点が必要です。

こんな発想から考えよう！

**居場所の
介護予防強化には
商店街との
「つなぎ」も有効**

- ・見守りには、商店街との連携も大切なネットワークです。
- ・薬局やクリニック、整骨院等の医療関係だけでなく、物販サービスや飲食店においても、「同じ商品を何度も購入している」「支払がうまくできない」等、日常的に接しているお客さんの変化にいち早く気づくこともあります。



この事例から学ぶポイント

荒井 崇宏

稲城市福祉部高齢福祉課

向陽台はニュータウン地域であり、都心に通勤するサラリーマン世帯のベッドタウンという性格が強く、昔から人が住んでいた旧来地域と比べると地縁が強いという地域ではありません。一方で、古いしがらみがなく、お互いの主張を伝えやすいオープンさを持っています。また、ニュータウンにはまちびらきと共に同じような世代の方が転入する傾向があり、あるタイミングで地域の高齢化が一気に進行するという特徴もあります。

こういった特徴を踏まえて、向陽台の方々は、今後予想される高齢化の波に対抗するため、地域での支え合いが必要になると考え、まずは顔見知りになれる場所を作ろうと「すまいる向陽台」の取り組みを始められます。そして、「すまいる向陽台」で顔見知りになっていった参加者の中に生活のお困りごとがある方がいたことから、ちょっとしたお困りごとを有償で助け合う「すまいるネット」という活動に繋がっていきしました。「すまいるネット」の取り組みを発足させる際には、地域住民全世帯へのアンケート調査を実施して、住民の意向を丁寧に把握し、取り入れていったそうです。

「すまいる向陽台」の代表・副代表はサラリーマンを退職された男性が担われており、サラリーマン時代に培った企画力、コミュニケーション能力等を発揮してご活躍されているようです。そして、「すまいる向陽台」は既存のカフェ(就労継続支援B型事業所)というアセットをうまく活用することで、喫茶業務を運営するという手間を省き、居場所をコーディネートすることに注力することができています。

また、「すまいるネット」のような支え合いの取り組みは、色々な方法により各地で取り組まれており、様々な先進事例や好事例もあります。そのような中、向陽台では我がまちにあった取り組みとすべく、アンケート結果も踏まえて、誰かに助けをもらうときに遠慮したり気を使ったりしないで済むようにあえて「有償」での助け合いを行う、15分単位で気軽に頼める等の工夫をしながら、ニュータウンならではの支え合いの取り組みを進められ、徐々に規模が拡大してきています。

この事例からは、やれることから始めるとその活動がきっかけとなって新たな活動が生まれてくること、人材(人財)はその人のこれまでの経験等から適材適所の活躍の場が必ずあること、既存のアセットをうまく活用することでやりたいことに注力することができること、好事例をそのまま地域に当てはめるのではなく地域の特徴や地域の意向を踏まえて取り組みに工夫を加えることの重要性、といった学びを得ることができるのではないのでしょうか。

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

稲城市

第1層 稲城市高齢福祉課 1名(嘱託)全地域担当

第2層 4圏域の地域包括支援センターに1名ずつ
(地域包括業務と兼任)

・第4地区(向陽台・長峰・若葉台)は地域包括支援センターこうようだい(運営:株式会社アースサポート)に配置されている。

SC

担当SCからのメッセージ

対面で意見を聞く中で、キッカケとなる瞬間をつかむ

・「人がまちをつくる」と思っています。住民の想いは十人十色。様々な思いで生活しておられます。この様々な思いを持った地域の『人と人をつなげていく』ためには、SCの調整力、地域の横のつながりが何よりも必要です。地域の情報収集だけでなく、住民や関係機関との“雑談”の中に新たなアセット発見のヒントがある!と感じています。そこで何か情報をつかんだら、必ず会いに行っています。実際に住民の方々に会って対面で意見を聞く中で、キッカケとなる瞬間をつかむことがポイントです。

住民主体の取り組みは、住民とSCと一緒に考える仕組みが大切

・お互いさまの支え合い活動は住民主体で取り組むことが重要で、住民への押し付けにならないように気をつけています。それには住民とSCと一緒に考える仕組みを作ることが大切です。それが第2層協議体だと考えています。

コロナ禍での工夫

・コロナ禍で活動が休止した際「せっかくつながった縁が途切れてしまう、何か方法はないか」と代表から相談を受けました。たまたま参加した研修先で他市協議体のSCから携帯電話会社によるオンライン会議の講座を教えてもらいました。その結果、協議体の会議はオンラインで開催できるようになりました。SNSを活用した地域活動の継続も試行中です。

02 かふえまんでサロン 高齢者向けサロン

香川県高松市香南町横井

女性の地域リーダーの力を結集してできた、福祉相談もできてコーヒーが美味しい「かふえ」



基本情報

名称 かふえまんでサロン 運営主体 まんでサロン香南
所在地 香川県高松市香南町横井 開所日 2019年6月5日
開催日時 水 9:30~13:00

香川県高松市 ※2021年10月高松市資料より
人口:424,530人 総世帯数:201,232
面積:375km² 人口密度:1,132.0人/km²
高齢化率:28.7%

高松市香南地区 ※2021年10月高松市資料より
人口:7,083人 総世帯数:3,121
面積:14.72km² 人口密度:481.1人/km²
高齢化率:29.5%

こんな居場所

【地域】合併前の町時代の付き合いが残るベッドタウン

かふえまんでサロンがある高松市香南町は旧香川郡香南町で、2006年に高松市に編入合併されました。香南町は高松市の山間部寄りにあり、農地が5割以上の面積を占めています。市中心部に通勤する人のベッドタウンで、高松空港から近いアクセスの良さにありながら、高齢化率は高松市の中で上位に入ります。

長年地域活動に関わってきた松下さんは、高齢者が増えていく地域の状況をなんとかしたいと考えました。「町内には活発な福祉活動がいくつもあるが連携できていない」「未来の子どもたちのための活動も必要」と、共通の課題意識を持った人たちに声をかけました。各団体の会長に協力を仰ぐなど人脈の豊かさは、合併前の町時代からの付き合いが残る地域の良さが活きました。

【居場所の様子】おしゃれして出かけるカフェ

2017年に「まんでサロン香南」を立ち上げ、「高齢者居場所づくり事業」を第1水曜と第4土曜に、「こども食堂」を第2・4土曜に開催することになりました。第4土曜は食の提供だけでなく共に作る体験活動を重視し、多世代交流の機会も提供してきました。活動は活発になってきましたが、予約や登録が不要でボランティア活動でもない、高齢者が気軽におしゃべりできる場がないことが気になりました。

そこで2019年には、気軽におしゃべりを楽しむ居場所「かふえ まんでサロン」をオープン。毎週水曜日に開催しています。運営メンバーは女性ばかり。看板メニューは、こだわりの渋皮をとったコーヒー豆から淹れるコーヒーと、と高級トースターで焼いたトーストです。利用者は毎回20名くらいで、第1水曜日には居場所活動を終えてやってくる人もいます。

「まると福祉相談員」の役割も持つ生活支援コーディネーターがいて支援につながる相談ができたり、参加状況を把握して見守りの機能も果たしています。

居場所運営団体の性質	NPO法人
	任意団体
	第2層協議体

拠点の性質	公共施設
	店舗／空き店舗
	自宅
	畑

生活支援コーディネーターの所属	第1層
	市役所
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	第2層
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	住民



「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

予約も登録もなく、ふらりと立ち寄れるカフェのような居場所が欲しい!を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

- ・同じ課題意識を持つ町内の活動団体の女性代表者に声をかけ、共鳴した人たちで立ち上げたのが「まんでサロン香南」です。
- ・松下さんを筆頭に、様々な活動をおこなってきた人たちが「一緒にやろう!」の精神で集まり、2017年から、高齢者の居場所活動や子ども食堂を実現させてきました。
- ・さらに、気になっていたのが香南地域には高齢者が気軽に集まれる喫茶店のような場所がないこと。登録や予約が不要で、気楽に出かけていってなじみの人とおしゃべりが楽しめる場所をつくろうと2019年、「かふえまんでサロン」を立ち上げることにしました。

主な関係者

- 住** まんでサロン香南 代表 松下さん
・長く地域活動に関わり、人脈が広い。各団体の代表へ声をかけて「まんでサロン香南」を立ち上げた。
- 住** まんでサロン香南 事務局メンバー
・2017年の会の立ち上げを支援した生活支援コーディネーターと元市職員がボランティアとして会に関わり、活動を支えている。
- SC** 第2層生活支援コーディネーター
・香南地区担当のSCは2名。「まるごと福祉相談員」の役割も持ち、参加者の困りごとの相談や見守りを行う。居場所運営では、記録や情報発信、補助金申請のサポート、コロナ対策など黒子としてサポートしている。

用語

【まるごと福祉相談員】介護・障害・子育て・生活困窮など分野を問わず相談支援に対応する。高松市が市社協に委託し、市内全エリアに配置。
【わが町こんなとこシート】高松市社協のコーディネーターが使用している地域資源把握のためのシート。地元の人しか知らないような細かな社会資源もまとめられている。

カギとなるアセット

人

- 運営者
★議員、地域ボランティア、市役所、社協など地域でさまざまな役割を担ってきた女性たち。
・第2層協議体「香南地区地域福祉ネットワーク会議」
- 特技のある人
★こだわりのコーヒーとトーストを提供できる人、エプロン製作ができる人

場

- 地域保健活動センター
★旧香南町保健センター。温泉施設がある道の駅「香南楽湯」と高松市社協香南支所に隣接し、地域の中心の好立地にある。

モノ・資金

- 補助金・助成金
・高松市高齢者居場所づくり事業
・高松市社協地域福祉活動促進事業
- かふえ運営費
・利用料金(コーヒーセット300円等)
・かふえスタッフ謝礼(各回4人、1人400円/回)
- 食材
・朝市で仕入れる野菜(隣接の「香南朝市」から)
・ご近所からお裾分け

情報・ネットワーク

- 地域全般の人・活動に関する情報
・香南地区コミュニティ協議会 ・たかまつこども食堂ネットワーク連絡会 ・「わが町こんなとこシート」
- 高齢者の情報と利用紹介
・高松市社協生活支援コーディネーター、まるごと福祉相談員(かふえまんでサロン開催時には同席し、参加者の相談対応を行う)
- LINEグループ(活動メンバーはLINEを活用して情報共有)



3つのアセットにフォーカス

担い手に
なったのは



様々な福祉活動をしている団体の長



ボランティアメンバー

カフェづくりで
活用したのは



こだわりのコーヒーとトーストを提供できる人、エプロン製作ができる人



「おしゃべりして出かけて行きたい」雰囲気づくり

会場として
活用したのは



空き状態になった旧保健センター



家賃無料、アクセスが良い活動拠点

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

・合併前の香南町時代からの付き合いが残り、地域愛が強い元気な高齢者が多い土地柄。かつて町議会議員をつとめた松下さんが、地域団体の女性リーダーたちに声をかけ、「メンバーひとりがひとりを誘うくらいの口コミの力」を発揮して活動メンバーが集まりました。

・立ち上げに関わった元市職員と社協SCは、退職後も活動を支えています。
・ボランティアメンバーは34人で全員女性。「スマイル」「笑顔で明るく楽しく」がモットー。

・助成金で制作したのぼり旗やスタッフおそろいのエプロンで、「お出かけして行くカフェ」という雰囲気を出しています。
・松下さんはコーヒーについて学んだ経験もあり、「せっかく出すならとびきり美味しいものを出したい」と、

コーヒーは渋皮をとった豆を挽いたもの、高級トースターで焼くパンとこだわっています。コーヒーセットにはゆで卵と野菜、果物、おまけのおやつがつき、喫茶店のモーニングメニューさながらです。

・会場である地域保健活動センターは、道の駅、社協支所、通所介護施設と接続する多目的施設の中にあり、高松市香南支所まで徒歩10分のアクセスの良い場所にあります。
・地域保健活動センターは、合併前は

町の保健センターでした。保健センター機能が町外に移転し、「地域保健活動センター」として地域団体等に貸し出すことになったことを受けて、生活支援コーディネーターが団体の活動場所として提案しました。

事例から発想しよう！ 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう！

まずは
話し合いや
活動の「場」を
つくってみる

・それぞれの活動や団体が一つに結集するのは簡単なことではありませんが、話し合いや活動の「場」をつくり、そこに参加してもらうことから始めるとハードルが下がるかもしれません。
・新たな活動は「プロジェクト」として立ち上げる方式も動きやすい手段の一つになりそうです。

こんな発想から考えよう！

誘い文句に
なるような
特徴を考える

・知人を居場所に誘う時、どんな風に誘うでしょうか。「おいしいランチが出るから行こう」「縁側があってちょっと休憩できるのよ」「今度、健康体操やらない？」等々。
・居場所に「誘い文句となるような特徴」があると、知人を誘いやすく口コミで広がります。また、誘われた方もイメージを持って参加することができます。

こんな発想から考えよう！

公共施設の
上手な活用方法
を探る

・公共施設は、多くの人が平等に使えるように利用日が抽選で決まるなど、使い勝手が良くないという声があります。一方、誰もが知っている場所で、個人の家よりも気兼ねがないと感じる人も。なにより料金が低価格という利点があります。
・会議室だけでなく、ロビーや関連部署のカウンター前、中庭など、様々なスペースを活用して、展示やリサイクルなどを行っている活動もあります。



この事例から学ぶポイント

お互い支え合い、学び合う活動から

つながり続けることを諦めない

日下 直和
社会福祉法人香川県社会福祉協議会

平成18年1月に高松市と合併した香南町は、市の南西部に位置し、なだらかな丘陵地に自然豊かな農村地帯が広がり、一方、町の南部には高松空港があり、その利便性から町内には様々な業種の企業が進出しています。まさに田園都市としての様相を呈している町であります。

自然環境も豊かで住みやすい町であり、また、合併前からボランティア活動や民生委員活動等の福祉活動が活発で、住民同士のつながりも強い地域でした。言わば地域づくりを進めやすい文化や土壌がもともとあったところで、これは地域の強みであると同時に、生活支援コーディネーター(以下、SC)にとっては、様々な活動に取り組みやすい地域でもあるとも言えます。

そのような中、食を通じた支援や居場所づくり、世代間交流を推進することを目的に、平成29年6月に「まんでサロン香南」が発足しました。活動は、当初の月2回開催の「高齢者の居場所づくり事業」と世代間交流のできる「こども食堂」に加え、令和元年6月からは、地域の人たちが気軽に集える「カフェまんでサロン」が毎週開催されるなど、活動の幅も徐々に広がっていきました。

活動場所の地域保健活動センターが無償で確保されたことも、活動が広がった大きな要因と言えます。運営資金についても、様々な助成制度等が活用できるようSCがつかないできました。このようにSCが「まんでサロン香南」の運営メンバーと、つかず離れずの、絶妙な間合いを取りながら伴走して支援に当たってきたことが、持続的な活動につながったとも言えます。

「まんでサロン香南」代表の松下桂子氏は、元町議会議員であり、幅広いネットワークを持ちリーダーシップをしっかりと発揮しながら、これまで活動を牽引してきました。松下代表は一見カリスマ型のリーダーのようにも見えますが、実は運営メンバーを支えて後押しする“しんがり”的存在であり、共感や共有をととても大事にするリーダーであると感じました。

また、団体としての活動の進め方は、決して縦ラインの方法で決めるのではなく、運営委員メンバーが主体的に話し合っ決めていて、さらには食生活改善や地元地区社協や地域の様々な団体と、上手く横につながり無理なく活動を広げていくことのできる、ネットワーク型の団体と言えます。

長らくコロナ禍で食を提供する活動が制限される中であっても、カフェではテイクアウトを実施したり、「こども食堂」の取り組みも同様で、屋外で感染のリスクを下げつつ、月2回、地元の大学生と一緒に、近くに広がるひまわり畑の観察等を行う「出張まんでサロン香南こども食堂・ひまわりプロジェクト」を実施するなど、つながり続けることを決して諦めませんでした。

運営メンバーどうしが支え合い、そこをSCがサポートし、また、SC自身もその活動から多くの学びと気づきを得て支えられています。いろんな支え合いの輪の重なりの中にも子どもたちや高齢者をはじめ、多世代の地域住民がいます。

そんな、「まんでサロン香南」の取り組みの中に、私自身も多くの学びを得たところです。

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

高松市

第1層 高松市 介護保険制度運営協議会 1名

第2層 高松市社会福祉協議会地域福祉課
地域共生社会推進室 15名

・44の小学校区に担当2名ずつを、15名のメンバーで重複して担当している。

SC

担当SCからのメッセージ

地域の信頼を得るために、アセットを共有する仕組み

- ・地域にSCが入ったときの最初の反応は「地域のことを知っているのか!」と言われてしまうことが多いです。そこで、地域のイベントに何度も参加して情報収集したり、様々な機会にできるだけ地域に足を運んだりすることで、地域の信頼を得てきました。
- ・そうやって築いた信頼も、担当が変わる度に一から積み上げるのでは、住民もSCも大変です。そこで、アセスメントシート「わが町こんなとこシート」をつくり、この情報を共有して地域のことを引き継げるようにしました。また、前任者と新任者が一緒に2ヶ月くらいは地域に出向いて、現場で実際に顔を合わせて引き継ぎをするようにしています。

「黒子」に徹する

- ・SCの基本理念は「あらゆる相談を断らない」です。「困ったときのSC」として、いつでも後方支援できる黒子としての存在になることを心がけています。
- ・黒子としてのサポートとしては、居場所開催時の記録や発信、補助金の申請の手伝い、コロナ禍での対策のあり方や周知方法などがあります。

03

喫茶わくわく

高齢者向けサロン

大阪府泉南郡岬町淡輪

"旧村"の強いつながりから生まれた、朝から集まれるみんなの居場所



基本情報

名称 喫茶わくわく

開催日時 月 9:30~15:00

所在地 大阪府泉南郡岬町淡輪
4326-1

運営主体 わくわく会

開所日 2019年12月

大阪府泉南郡岬町 ※2022年1月岬町資料より
人口:15,035人 総世帯数:7,436
面積:49.18km² 人口密度:305.7人/km²
高齢化率:39.2%

岬町淡輪地区 ※2018年10月淡輪地区資料より
人口:9,357人 総世帯数:4,151
面積:9.05km² 人口密度:1,034人/km²
高齢化率:34.0%

こんな居場所

【地域】過疎化高齢化が進む、昔ながらの顔見知りに住むまち

喫茶わくわくがある岬町は、和歌山市に隣接する海・山のある風光明媚なまち。大阪・難波まで南海電鉄で50分のベッドタウンでもあります。退職後の住民が現役時代の経験を地元で発揮してくれるという期待も高まる地域です。しかし、少子高齢化が進行中で2021年4月から過疎認定をされており、介護認定を受けている人も多いです。

岬町は旧村と新興地区に分かれ、新興地区には近年30~40代の若い世帯の移住も増えてきています。

喫茶わくわくは、昔ながらの顔見知りが多い旧村地区にあります。居場所が立ち上がる前は、高齢者の健康維持のために「朝のラジオ体操」、体操終了後は小学生の登校の見守り活動を行ってきました。

【居場所の様子】特技が活かせる場

喫茶わくわくは毎週月曜日の朝9時半~15時までオープンしています。岬町内に住んでいる人であれば誰でも参加できます。

メニューはモーニング300円。パン、ゆで卵、バナナ、お菓子が紙皿に盛られ、コーヒーが付きます。体操で体を動かし、子どもたちの登校見守りと交流をした後にカフェに集っての楽しい語らいは、格別な時間となっています。

居場所でわいわいにぎやかに過ごすうちに、顔見知りも増えていきました。そんな中、買い物や外出に困っているという声も出ました。そこで、「新鮮な魚を買いに行こう!」と、「道の駅みさき」まで送迎する買い物支援活動など、ニーズに応じた活動が次々に展開されています。

居場所運営団体の性質	NPO法人
	任意団体
	第2層協議体

拠点の性質	公共施設
	店舗／空き店舗
	自宅
	畑

生活支援コーディネーターの所属	第1層
	市役所
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	第2層
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	住民



「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

ラジオ体操の後、おしゃべりする場所が欲しい！を実現した取り組みについて、アセットの活用に注目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

- ・岬町淡輪は、ほとんどの人が顔見知りという人間関係のつながりが深い地域です。淡輪に生まれ育ち淡輪地区福祉委員会副委員長で民生・児童委員でもある吉田さんは、「これからも安心して暮らし続けられる地域にするためになんとかしたい!」と考えていました。
- ・吉田さんは「高齢者が楽しく健康維持するためにラジオ体操の会を立ち上げたい」と思い立ち、SCの中家さんに相談しました。吉田さんの親族が経営していた整骨院前の駐車場で毎週月曜日の朝7時半からのラジオ体操がスタートしました。
- ・参加者の「ラジオ体操の後にお茶を飲んでおしゃべりする場がほしい」という声に後押しされ、空き店舗となった整骨院を借りてモーニングサービスの提供が始まりました。

主な関係者



生活支援コーディネーター(SC) 中家さん

- ・大阪府岬町社会福祉協議会9年目、第1層SC活動歴6年目。
- ・前職は宝飾デザイナー、販売等。岬町役場、デイサービス勤務を経て現職。



喫茶わくわく 運営責任者 吉田さん

- ・淡輪地区福祉委員会副委員長、民生・児童委員副会長。地域に親族や同窓生など、昔からの知り合いが多く住んでいる。民生・児童委員歴も長く地域からの人望が厚い。



わくわく会 会長 多賀井さん

- ・高齢者支援・地域の居場所づくりなどの活動を行うため、淡輪6区の住民が組織化した「淡輪6区わくわく会」の会長。買い物支援車両提供兼ドライバー、喫茶の看板や感染予防パターションの制作、敷地の草刈りまで多くを担っている。吉田さんの従兄弟。

カギとなるアセット

人

○運営者

- ★旧村に代々住んでいる淡輪6区の住民の強いつながりがある人
- ・住民の共助の精神
(できることは自分で。気づいた人がさっさと動く)
- ・料理やDIYなどそれぞれの得意なことがある人
- ・岬町に住む様々な業種に就いていた退職者

場

○居場所

- ★旧ニコニコ鍼灸整骨院の建物と駐車場
(無償で借りている)

○買い物支援の拠点

- ・道の駅 みさき「夢灯台」

モノ・資金

○助成金

- ・岬町(R3.5～ 岬町住民主体地域活動補助金)

○喫茶運営費

- ・モーニング300円、コーヒーのみ(お菓子付き)100円

情報・ネットワーク

○公的機関との連携

- ・岬町生活支援・介護予防サービス協議体
- ・岬町社会福祉協議会 淡輪地区福祉委員会
- ・岬町

○地域全般の人とのつながり

- ・「グリーンピース」(淡輪6区の新興住宅側の住民組織)
- ・淡輪盆踊りなどの伝統的イベント

○他地区とのネットワーク

- ★多奈川地区福祉委員会「赤提灯」(地域ワークショップ)
- ★淡輪10.11区「地域を知る“BAR”」

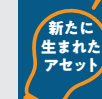


3つのアセットにフォーカス

担い手に
なったのは



旧村地域の
人のつながり

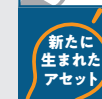


それぞれの得意を
活かしたボランティア

会場として
活用したのは



代表の家族が所有する
空き店舗

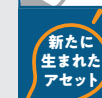


使い勝手がいい
専用の活動拠点

居場所のイメージづくりに
活用したのは



他地区の地域ワークショップ
に参加、先進活動を知る



「わくわく会」の
具体化へ

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

- ・淡輪旧村地域は、親戚同士や同窓生など昔からのつながりがあり、長いご近所付き合いの中での共助の精神が残っています。
- ・喫茶わくわくを運営する有志ボランティアは旧村地域の吉田さんのつながりが基軸になっていますが、新興地

区からの参加者とも自然な交流が生まれるようになっていきます。

- ・「人は頼られると輝く」とSCの中家さんは考えています。料理やお菓子づくり、DIYなど「それぞれの得意なことで出番づくり」を意識して活動を支援しています。

- ・ラジオ体操を行うために整骨院の駐車場を借りていましたが、整骨院が空き店舗だったこともあり、居場所スペースとして無料で使わせてもらえることになりました。大きな掃き出し窓があり、換気も万全。コロナ禍でも対応できる環境が確保できました。

- ・拠点の前の道路は小学校の通学路です。ラジオ体操終了時は参加者が自然に小学生の登校見守りをするようになり、高齢者と小学生の交流も実現しました。

- ・吉田さんは平成30年に町内の他地区で開かれた地域ワークショップに参加して岬町内の居場所活動や買い物支援などの活動報告を聞き、まちの今後を話し合う機会を得ました。

- ・ワークショップのあとの居酒屋タイムでは、他地区の住民・関係者と話し合っ

事例から発想しよう! 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう!

**みんなで
特技や好きなことを
シェアしてみる**

- ・居場所では、誰のどんな特技でも発揮できる可能性があります。特技や好きなことについて、語り合うプログラムを行っている居場所がありました。準備の手間をかけなくても、参加者が少なくてもOK、まずは1回やってみることで、気軽な出番づくりができます。

こんな発想から考えよう!

**まずは
できることから
動いてみる**

- ・都合の良い空き店舗は簡単にはみつかるものではありませんが、条件を満たすことを優先させるより、あるもの・できることからスモールステップで進めるうちに訪れるチャンスもありそうです。

こんな発想から考えよう!

**我が町や
隣町の活動を
調べてみる**

- ・他団体の活動を見学に行くことは、とても参考になります。活動内容だけでなく、参加者やスタッフの構成、開催時間や頻度なども見学ポイントです。
- ・まずは我が町や隣町の活動から調べてみましょう。見学に行くときはSCだけではなく、一緒にすすめる住民メンバーと誘い合って行きましょう。同じものを見た経験がチームづくりに生きます。SCだけでなく一緒に進める住民メンバーと一緒に、がポイントです。



この事例から学ぶポイント

隅田 耕史

NPO法人フェリスモンテ

「住民の主体性」に沿ったSCの支援というものがよくわかる事例です。

喫茶の居場所活動を最初に始めるのではなく、駐車場のスペースを活用してラジオ体操から始めたというのは特徴的だと思います。その参加者たちから、「ラジオ体操後に座ってお茶でも飲みたい」という声が出てくるのは、とても自然な流れです。

また取材の一環で、「道の駅 みさき」で食べた「生しらす丼」は、とてもおいしかったです。「このおいしい魚を、自分の目で見て、鮮度の良いまま買って帰って食べたい」と思うのは、とても自然なことだと思います。また、それを叶えるために運転してあげようと思う人たちが何人もいるというのも、そのニーズが共有されているからこそで、この地域ならではのものだと思います。

コロナ禍に、『喫茶わくわく』を閉めようとしたが、開くのを扉の前で待っている人がいたので開けた」という話も象徴的なように思いました。

これらの活動は、自分たちの場所で、自分たちで意思決定ができるからこそだと思います。取材の途中には、盆踊りを披露してくれました。はじめは「さわりだけ」ということでしたが、いつの間にか踊っていました。

「地域を知る“BAR”」などに参加した吉田さんのように、先行して活動している地域の集まりに、関心や意欲のある方が参加していくという枠組みができているところが素晴らしいと思います。

SCの中家さんへのインタビューの中で、喫茶を立ち上げるために準備をしていた地域があったが、開設直前に中止になったという話がありました。中家さんはその経験について否定的にとらえるのではなく、「それぞれの地域に合ったものを、必要なタイミングで行っていくことの大切さを知った」というように前向きに語られていたのが印象的でした。

「喫茶わくわく」の取り組みやその発展は、まさにその地域の、そこで活動している方に合った動きだと思います。そして活動が形になっていった上で、行政とも話し合いを重ね、継続性を高めるように補助金の仕組みを作ったことも、とても大切なことだと思います。

今後、買い物支援を広げていくことを準備されているということなので、これまで培ってきたSCとしての支援プロセスを踏まえて、無理なく、できるところから活動を始めていけることでしょう。

住民の気持ちとSCの動きを時間軸で見ていくことで、SCにできることが見えてくるのではないのでしょうか。

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

大阪府泉南郡岬町

第1層・第2層兼任

岬町社会福祉協議会 1名(専任)全地域担当



担当SCからのメッセージ

住民の方が主役になるために、前に出すぎず引き際を見極める

・モットーとして「SCから提案」ではなく、常に地域の人に「どうしましょう?何が必要ですか?」と「訊く」ことを大事にしています。かつて「無人喫茶」をやろうとかなり話が進んでいた企画が頓挫してしまった経験があります。もしかしたらあまり必要性を感じていなかったのに、押しつけてしまったのかも知れないとの反省があるからです。

・また、「それは難しいのでは…」と否定的なことは言わないようにしています。住民のみなさんが本当にやりたいことは何かを見つけ出す姿勢をいつも心がけています。

わからないことは、素直に住民の方やいろんな方に支えてもらう

・新人SCの時には「何をしたらいいのか?」全く分からず思い悩んだこともありましたが。今では、分からないことは「教えて下さい!」という方々に「訊く」ことで道筋が見えてくると確信しています。住民の方が空いている曜日、時間に合わせ出向き、フットワーク良く地区内を回って「教えて下さい!」というスタンスです。これが地域のニーズを知る一番の近道だと実感しています。

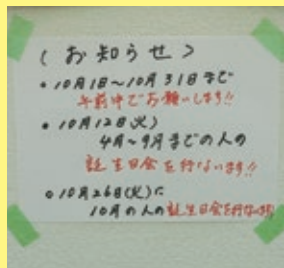
今後の展開

・わくわく会では、居場所づくり、買い物支援と、活動の輪が広がっていますが、さらに今後、「喫茶わくわく」は防災・減災の拠点、避難所としての機能も持つことが求められていると感じています。「喫茶わくわく」に行けば、安心・安全・楽しい!という居場所になることをめざしています。

04 やまもりいこいの家 高齢者向けサロン

愛知県知多市岡田

福祉NPOの経験が生きる、週5日通える高齢者の居場所



基本情報

名称	やまもりいこいの家	開催日時	月～金 9:30～15:00
所在地	愛知県知多市岡田字上中田65-2	運営主体	やまもりいこいの家
		開所日	2019年6月
愛知県知多市 ※2021年11月知多市資料より 人口:85,061人 総世帯数:36,428 面積:45.9km ² 人口密度:1,853.1人/km ² 高齢化率:28.0%		知多市岡田地区 ※2021年11月知多市資料より 人口:7,931人 総世帯数:3,146 面積:4.06km ² 人口密度:1,953.4人/km ² 高齢化率:26.4%	

こんな居場所

〔地域〕古い町並みはかつて栄えた産業の名残

「やまもりいこいの家」がある知多市岡田地区は、知多半島の北西部に位置し、交通の利便も良好な住宅地です。かつて隆盛を極めた知多木綿産業の様子が色濃く残る古い町並みが現在も多く残されています。「岡田街並み保存会」が設立され、古民家の1つを居場所として活用する取り組みが試みられていました。

このような地域で、それまで酒屋「やまもり」を営んでいたご夫婦が店を閉める際、空き店舗の有効活用を周囲に相談しました。岡田地区で先に立ち上がっていた居場所「岡田なごやかサロン」とつながったことで気運が高まり、居場所づくりが実現しました。

〔居場所の様子〕地域の誰もが知っている元酒屋で平日5日開催

「やまもり」は、昔からある酒屋で、平坦地でバス停にも近いというアクセスの良さがあります。この立地の良さを活かして、平日週5日開催する常設サロンが行われています。

元店舗らしく、前面はガラスで中の様子がうかがえます。自動ドアで中に入ると、広い長方形の会場に、テーブルとイス、ソファ、お茶が用意されたカウンター等があり、壁には童謡の歌詞や手づくりの風や書道等の作品などが展示されています。和気あいあいとお茶を飲んだりおしゃべりをしたり、時には体操をして過ごします。

杖をついていた方が「今日は杖なしで」と歩いて来られたり、みんなの生きがいの場になっています。昔ながらの知り合いが多い地域とはいえ、参加者の中には初対面同士もいるそうで、地域のきずなはこの居場所でさらに広まっています。

居場所運営団体の性質	NPO法人
	任意団体
	第2層協議体

拠点の性質	公共施設
	店舗／空き店舗
	自宅
	畑

生活支援コーディネーターの所属	第1層
	市役所
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	第2層
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	住民



「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

誰もが知っている元酒屋の閉店を機に居場所にしたい!を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

- ・2017年、知多市岡田一区で先代からの酒屋「やまもり」を営んでいた平野さんは、高齢を理由に閉店を決め、別の地区で古民家再生の居場所を運営していた勝崎さんに、店舗を地域のために有効活用できないかと相談しました。
- ・「やまもり」があるのは誰もが知っている地区の中心地ですが、今は高齢者が集まれる喫茶店などが無いエリアです。勝崎さんはその話をSCにつなぎました。
- ・ここで高齢者が楽しく賑やかに集まれる居場所を作ろうと決まり、SCの市川さんを中心にして居場所づくりが動き出しました。



第2層生活支援コーディネーター 市川さん

- ・2017年から知多ブロックの第2層生活支援コーディネーター。NPO法人あゆみ設立代表。50代で福祉の勉強を開始。1990年代から市民互助型在宅福祉活動が活発に展開されていた知多市で、先輩団体から学びながら平成10年に自宅を拠点としてNPO法人あゆみを設立した。



元酒屋「やまもり」オーナー 平野さん夫妻

- ・親の代から酒屋を経営、空き店舗の再活用を同年会で知り合いだった勝崎さんに相談した。



「やまもりいこいの家」運営メンバー

- ・「岡田コミュニティ」長寿会関係者を中心に男女合わせて約10名。



「岡田なごやかサロン」代表 勝崎さん

- ・知多木綿で栄えた岡田の歴史文化を活かすまちづくりの会の主宰者。岡田三区の古民家活用の居場所「岡田なごやかサロン」の代表。

主な関係者

カギとなるアセット

人

○運営者／参加者

★岡田コミュニティ関係者
(回覧板がしっかり回り、長寿会(老人会)の活動も盛ん)

・岡田第一区の住民

場

★拠点である元酒屋「やまもり」

モノ・資金

○知多市介護予防・日常生活支援推進事業補助金

・初年度100万円(拠点整備)

・年間35万円程度(運営費)

★クーポンチケット

岡田コミュニティが発行する100円クーポン(敬老祝として配布)を使用できる

○地域の農家で育てた野菜や果物

情報・ネットワーク

○地域の人、活動に関する情報

・岡田コミュニティ、長寿会、同年会

○高齢者の情報と利用紹介

・NPO法人あゆみ

・岡田コミュニティ回覧板

○運営に関する情報

・岡田三区の高齢者の居場所「岡田なごやかサロン」(サロン運営の先輩格)



[同年会] 同じ年に生まれた人で行く親睦の会。
厄払いや還暦会などを行う。



3つのアセットにフォーカス

担い手に
なったのは



昔からよく知る
仲間たち



スタッフや参加者に

会場として
活用したのは



元酒屋、
屋号「やまもり」



アクセス便利な
常設拠点

広報ツールとして
活用したのは



岡田コミュニティの
100円クーポンチケット



居場所利用の
きっかけを地域にPR

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

・地域には、同じ年齢の人たちでつくる「同年会」という集まりがあります。空き店舗転用の計画が始まったのは、同年会で「岡田なごやかサロン」の話を「やまもり」の平野さんが聞いたことがきっかけです。

・岡田地区はこの地に長く住んでいる人が多くいて、長寿会や同年会をはじめ、昔からの人間関係が続いています。互いによく知っている仲間同士の口コミが居場所に人を引き寄せています。

・元酒屋は「やまもり」の屋号で地域の人に知られており、街道沿いのバス停からすぐの好立地にあります。高低差もなくみんなが通しやすい場所にあります。
・SCが市の補助金を紹介し、内装工事やエア

コンの設置ができました。さらに拠点の月2万円程度の拠点借上料にも補助金が使われるため、オーナーの平野さんの負担は最小限に抑えられています。

・岡田コミュニティは、地域内の商店で使えるクーポンを発行して、敬老祝として配布しています。SCが商店街にかけあい、「やまもりいこいの家」でも使えるようにしました。飲み物とお菓子がつく100円の参加費にクーポンが使えます。

・「クーポンが使える店」としてコミュニティの回覧板でも紹介されていて、地域に知ってもらうためのよい広報になっています。

事例から発想しよう！ 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう！

**地域に
参加できる
会がないか
調べてみる**

- ・学校の同窓会や同期会、お寺や神社・祭に関係する人の集まりから、犬の散歩仲間まで地域には様々なコミュニティがあります。口コミは思わぬネットワークで広がることも。
- ・町会自治会以外の小さな集まりにも目を向けると、新たな出会いがあるかもしれません。

こんな発想から考えよう！

**空き店舗を
長く安定して
活用することを
考える**

- ・家賃を対象にしている、行政や民間の補助金があるかを調べてみましょう。
- ・補助金がない場合でも、例えば、会費や寄付を集める、フリーマーケットをするなどのほか、居場所の特徴を活かした、部屋貸しやレンタルボックスで趣味の作品販売など資金調達の工夫をしている例があります。

こんな発想から考えよう！

**「お墨付き」を
活用する**

- ・行政や町会自治会からの支援や協力は運営への大きな後押し。地域の掲示板や回覧板のPRも効果があります。
- ・助成金を受けたらその事業名や、支援団体からの寄付や協賛をチラシに掲載するなど「お墨付き」をうまく活用しましょう。



この事例から学ぶポイント

松下 典子

NPO法人ゆいの会

前知多市第1層生活支援コーディネーター(2016.4-2021.3)

NPOがSCを担う意義とは

NPO法人ゆいの会は、2016年から2020年まで、知多市から委託を受け第1層生活支援コーディネーターとして活動を進めてきました。また、2017年からは、5中学校区のうち3地区をNPO法人、2地区を社会福祉協議会が第2層生活支援コーディネーターとして取り組みを進めています。

私は1991年に「ゆいの会」を立ち上げ、変化する身近な暮らしの課題解決として「私たちができる」お互い様の助け合い活動に取り組んでいました。それが住民互助の在宅支援になり、さらに介護保険制度につながりました。NPOの長年の活動の成果として、市、社協と対等な関係で議論し新しい仕組みを作り上げていく機会を得たことにワクワクしました。

生活支援コーディネーターの役割のひとつである「介護予防・日常生活支援」の仕組みとサービス開発については生活者の視点からNPO活動ですでに取り組んできたことで、住民の自発的・自立的助け合い活動の要である居場所づくりの啓発とその実践支援に努めてきました。

豊かな暮らしを追い求めて多様化した社会は、核家族化や一人世帯が増加し、かつてあった町内会やコミュニティ機能がなくなり始めています。第2層SCの役割は日常生活圏域で暮らしの気になることや不安に思うことを出し合う場を設け、一人一人の個性や特技、経験や情報をつなぎ新しい仕組みづくりを考えるチームを作ることと考えます。居場所は人が出会い情報が集まる生きた学びの場であり、自らも意識を変えていく実践の場となります。

生活支援コーディネーターはこれまでになかった新しい地域の仕事です。住民のやる気と小さな仕事づくりの調整役として、さらに仲間の新しい取り組みを黒子となってリードしネットワーク化する伴走者だと考えてきました。拠点の確保や仲間づくり、事業化、組織化するプロセスは、地域社会を立体的、構造的に再編する力強さがあります。「自分が当事者になる5年後10年後に向けて、この地域で住み続けるための仕組みを作ろう!」と住民に呼びかけ、やる気を引き出す役割ともいえます。

地域は生き物、進化し続けています。アセット重視に加えて、プロセス重視の視点も大切です。生活支援コーディネーターが取り組む居場所支援は重層化するケア問題の解決だけではなく、人が育ち合う小規模多機能自治へのプロセスであり、地域再構築の道具であることを、地域で活動するみなさんと共有したいと思っています。

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

知多市

第1層 知多市福祉部長寿課 1名

第2層 5中学校区ごとに1名ずつ配置

(配置組織:知多市社協2地区、NPO法人あゆみ、NPO法人ゆいの会、NPO法人だいこんの花)。

SC

担当SCからのメッセージ

ヒト・モノ・コト(アセット)をみつけたらすぐにアタック

・とにかく多くの人と会って会話を意識しています。居場所づくりに必要な「ヒト・モノ・コト」を見つけたら、すぐにアタック!です。やまもりいこいの家の情報を得たときも、すぐにオーナーの平野さんに連絡をとって会いに行き、いかにこの場所が居場所として適しているかを熱弁しました。情報のつなぎやアクションのスピード感は、本当に重要だと考えています。

地域のキーマンを大切に、時間をかけて関係づくり

・地域のキーマンとの関わりは重要です。半年くらいじっくり時間をかけて信頼関係を醸成しています。
・岡田地区は昔からの地縁が強く残る地域です。地区外から来た自分がSC活動を始めた当初は「あなた誰?!」と何度も言われ、自分の存在を認めてもらうまでにとても長い時間がかかったと感じています。
・私の活動の原点として「健康体操」がありますが、これを高齢者に伝えることがコミュニケーションツールとなり、様々な会話が生まれ、自分のさらなる気づきや学びにつながったことはとても重要な経験です。

コロナ禍での工夫

・コロナ禍でサロンに来ることを控えている人もいますが、とにかく安否確認が重要だと考えており、現在は「お誕生日会」を開催して、各人の様子や体調をチェックしています。とにかくあの手この手でコロナ対策を必死でやっているというのが現状です。

05 カフェ いしださんち

高齢者向けサロン

東京都稲城市平尾

NPO元代表が自宅の居間にひらいた地域の居場所



基本情報

名称 カフェ いしださんち 運営主体 NPO法人 支え合う会
所在地 東京都稲城市平尾 みのり

開催日時 第1日と第3土 13:00~15:30 開所日 2012年6月

東京都稲城市 ※2022年2月住民基本台帳より 稲城市平尾地区 ※2022年2月住民基本台帳より
人口:93,003人 総世帯数:41,935 人口:12,182人 総世帯数: 6,001
面積:17.97km² 人口密度:5,175.4人/km² 面積:1.50km² 人口密度:8,121.3人/km²
高齢化率:21.9% 高齢化率:30.9%

こんな居場所

〔地域〕丘陵地帯を開発した、
眺めは良いがアクセスに課題ありの住宅街

カフェいしださんちがある稲城市平尾地区は新宿副都心から南西へ約20km離れた多摩ニュータウンの入口に当たり、1970年代から計画的に市街地整備が進みました。特に「いしださんち」周辺は、急峻な丘陵地帯が切り開かれた眺望が良い場所である一方、高齢者にとっては車等の足がないと移動が難しいという課題があります。

居場所オーナー石田さんは、長年高齢者向けの食事サービス活動団体の役員として活動してきましたが、2011年東日本大震災をきっかけにご近所同士がつながる居場所の必要性を実感しました。しかし、住宅街である自宅周辺には集まれる場所がなく、翌年自ら自宅でカフェを開催することにしました。

〔居場所の様子〕自宅開放カフェは、ご近所のなくてはならない居場所

ある第3土曜の昼過ぎに訪ねると、三々五々人が集まり和やかな時間が流れ始めました。ひとしきりおしゃべりすると「そろそろ歌いますか」と歌詞が書かれた模造紙が壁にかけられ、ピアノ伴奏に合わせてセレクトされた歌をみんな歌います。その後は、手づくりのプリンとコーヒーでちょっと休憩。ときにはマジックショーが行われたり、隣の和室で体操をしたり。「生活支援コーディネーターの健康講座や、落語の催しもいいのでは」など毎回プログラムを工夫しています。最近はZoomでのセミナー視聴も行っています。

一人暮らし世帯が多いエリアでもあり、配食弁当をみんなで一緒に食べる「おひとり様夕食会」も開催されるようになりました。今では、ご近所のみなさんにとってなくてはならない居場所になっています。

居場所運営団体の性質	NPO法人
	任意団体
	第2層協議体

拠点の性質	公共施設
	店舗／空き店舗
	自宅
	畑

生活支援コーディネーターの所属	第1層
	市役所
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	第2層
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	住民



「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

公的集会所がない住宅街の中に身近に通える居場所が欲しい！を実現した取り組みについて、アセットの活用に注目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

- ・居場所オーナーの石田さんは、1983年設立の食事サービス活動団体「支え合う会みのり」のメンバーです。
- ・石田さんが住んでいるのは、独居高齢者が多く、公的な集会所からも離れている「平尾・美望会地区」。自身も夫を見送って一人暮らしとなり、長く暮らしてきたこの地で楽しみながら近隣での関係づくりをしたい、それが何かのときのためにみんなの役に立つと考えて、自宅のリビングを開放して「カフェいしださんち」をはじめすることにしました。
- ・夫の介護期間中に地域包括支援センターの支援を受けていたこともあり、すでに相談できる関係ができていました。



居場所オーナー 石田さん

・「NPO法人支え合う会みのり」元理事長。1970年代から丘の上に開発された「平尾・美望会地区」に暮らしている。2011年に夫を見送り一人暮らしとなった。気張らずに自宅に人を招くことができるのは、海外駐在時代の経験が大きい、と話す。



生活支援コーディネーター(SC) 白井さん

・社会福祉法人平尾会が受託する「地域包括支援センターひらお」に第2層SCとして配置されている。平尾会に20年勤務、病院・老人ホームの看護師を経て、現在は地域包括支援センターでSC業務を兼任している。ケアマネジャー。第2層SC活動歴6年目。

主な関係者

カギとなるアセット

人

○運営者／参加者

- ・居場所オーナーの石田さん
- ★支え合う会みのりのボランティア仲間(管理栄養士)
- ★婦人之友「友の会」仲間(ケアマネジャー、歌唱指導)
- ・働き者の参加者 民生・児童委員、美望会(住民自治会)
- ・声楽、ピアノ、フルート、ハーモニカ、日本舞踊など「一芸」ある人たち

場

○住宅街にある居場所

- ★石田さん宅(1970年代築のゆったりした2階建て住宅。大きな窓、ピアノがある広いリビング)
- ・リビングにあるプチギャラリー(参加者の作品を展示)
- ・坂道、階段がある「バリア有りの環境」(石田さん宅まで歩いて来られるように頑張る)

モノ・資金

○活動に必要なモノ

- ・助成金は利用していない。居場所オーナー 石田さんによるものが大きい。

○参加費

- ・食事代や弁当代などの実費

○食事

- ・支え合う会みのりの配食弁当(お一人様夕食会で利用)

情報・ネットワーク

○地域全般の人・活動に関する情報

- ・美望会(平尾地区の住民自治組織。坂の上で眺めがいいことからこの名がついた)

○高齢者の情報と利用紹介

- ・介護予防日常生活支援総合事業 A「かがやき倶楽部のり」(支え合う会みのりが行ってきた経験を活かした調理実習プログラムが特長。カフェいしださんちと連携関係)

★稲城市地域包括支援センターひらお

- ・みどり会(老人会)



3つのアセットにフォーカス

担い手に
なったのは



長年NPOや福祉関係で活動してきた仲間



居場所で特技を
発揮する人



会場として
活用したのは



自宅のリビングと
キッチン



近所の人が集まる住宅地
のなかの「おうちサロン」



居場所で介護予防を強化するために
活用したのは



地域包括
支援センター職員



健康・介護予防講座の
講師や相談対応

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

- ・長年、NPOで活動してきた石田さんは広い人脈を持っています。現役ケアマネジャーの友人や、みのりの仲間が「カフェいしださんち」のコアメンバーになりました。
- ・基本的に石田さんは忙しく立ち働かせせん。キッチンでは「勝手知ったる」メンバーが

コーヒーを淹れたりお菓子を運んだり、後片付けも手際よく最後まで行います。

- ・お菓子づくりが得意な人、料理が得意な人、歌のピアノ伴奏をしてくれる人、写真撮影が得意な人など、個性豊かな人の輪が活動を豊かに楽しくしています。

- ・坂の上のゆったりした昭和モダンの一軒家。明るくて見晴らしの良いリビングと続きの和室は、20人は集まれる広さがあります。
- ・かつて来客が多かった石田さん宅はキッチンも広く、またお客さんが多かったので、揃いの食器もたくさんありました。

- ・坂の上のため、当初白井さんは「坂を登って来られるかな」と心配しましたが、「行きたい気持ち」があると頑張れる、体力づくりにもつながるのではと考えるようになったそうです。

- ・SCの白井さんは、「カフェいしださんち」に必要な人に紹介するほか、存在を知ってもらうように心がけています。
- ・年に数回はプログラムの講師として招かれ、フレイル予防の講話をしたり、高齢者のための暮らしの情報を伝えています。生活支援コーディネーターや地域包括支援センターを住民に知ってもらい、いざというときには気軽に

に相談できるような関係づくりをしています。

- ・周辺は路線バスも通らず高齢者にとっては不便なエリア。令和元年から毎週火曜日、地域包括支援センター運営法人「平尾会」が地域貢献の一環として、デイサービスの送迎車を商店街まで運行することになり、白井さんも調整役として関わりました。

事例から発想しよう！ 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう！

**特技が
活かされると
楽しく
参加できる**

- ・自分の特技を活かす場があり、みんなに喜んでもらうのは、活動に参加する大きな動機のひとつです。
- ・雑談の中で趣味や特技の話題が出たときに「今度やろう」と盛り上がったり、「○○がやりたいな、できる人いないかな」とあらゆるところで話題に出してみるのがコツです。

こんな発想から考えよう！

**民有地でも
みんなで
集まれる
場所はある**

- ・自宅を開放するのは抵抗があるという人も多いでしょう。家の中は開放せずに、「庭」や「駐車場」のみを活用している例もあります。
- ・また、営業時間外の飲食店店舗を借りるなど、店舗を活用させてもらい、居場所を開いている例もあります。

こんな発想から考えよう！

**居場所の
介護予防強化には
専門職との
「つなぎ」を考える**

- ・「地域包括支援センターへ相談に行くのは敷居が高い」という話はよく聞きます。居場所でSCと住民が顔見知りになれば、いざというときの相談がスムーズです。
- ・さらにSCの名前と顔を覚えてもらうために、似顔絵を入れたチラシを作成して配布するなどの工夫をしている人もいます。



この事例から学ぶポイント

祐成 保志

東京大学大学院人文社会系研究科

「カフェいしださんち」は、見晴らしのよい丘の上にひらかれた住宅地にたたずむ個人宅です。開催日には、近所にお住まいの方々が続々と集まってきます。この居場所が10年にわたって継続されてきた原動力は何でしょうか。

入居の時点で住宅は完成していても、暮らしが完成しているわけではありません。想定していなかった不便が、日々の生活の中で生じます。ときには、個別の対処では足りず、住民が知恵と労力を持ち寄って、共同で解決することが求められる場面もあるでしょう。このような活動の積み重ねを通じて、住宅地は“まち”へと成熟し、家族の成長や老いをつつみ込む厚みと奥行きをもちはじめます。そのような時間を共有してきた人たちの経験と記憶が、「カフェいしださんち」の基礎を形づくっています。

この事例が教えてくれるのは、アセットが、はじめからアセットとしてあらわれるわけではないということです。それは、アセットが単独で力を発揮するわけではなく、他のアセットとの関わりのなかで価値を持つことを示しています。

例えば、「カフェいしださんち」の立地について考えてみましょう。すばらしい眺望が得られる半面、交通の便はよくありません。公民館などの公的な施設からも離れた場所にあります。それらは、単独でみれば不利な条件ともいえますが、むしろ、居場所を維持する力になっています。

この逆転を可能にしたのは、自宅のリビングルームを開放しようと思い立った石田さんの人柄、支え合う会みのりの配食サービスで培われたネットワーク、そして参加者のあいだで共有されている心の習慣（親しみやすさ、おせっかい、誰も取り残さないという思いなど）、といったアセットです。

公的な補助を受けていない個人宅での活動であることもまた、必ずしも有利な条件とはいえません。しかし、コロナの感染拡大という危機的状況にあっても、孤独を回避するというミッションを貫いて、活動を持続することができました。

「カフェいしださんち」は、住民の発意と創意工夫でつくられた居場所です。このため、第2層SCの白井さんの関わり方は、立ち上げや運営面での直接的なサポートとは異なり、健康管理講座のように、参加者の関心に応じた情報提供が中心です。この事例からは、地域ですでに活動している多様な交流の場があることに気づき、それらの担い手との接点をつくり、第2層協議体などを通じて、グループ間の情報交換や助け合いを促すことが、SCの重要な役割であることが分かります。

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

稲城市

第1層 稲城市高齢福祉課 1名(嘱託)全地域担当

第2層 4圏域の地域包括支援センターに1名ずつ
(地域包括業務と兼任)

・第1地区(坂浜・平尾)／地域包括支援センターひらお(運営:社会福祉法人平尾会)

SC

担当SCからのメッセージ

今あるものを知ってもらうことも大切

・SCとしての活動当初は「新しいものを作らなければいけない」と思っていたのですが、現在は「今あるものを知ってもらうことも大切」と感じています。地域住民にまだ知られていない交流の場やつながりが、すでにたくさんあることに気がついたからです。「カフェいしださんち」もその中の1つです。独居や高齢者のみの世帯が多い地域なので、気軽に参加できる居場所としてもっと紹介していきたいです。

・また、社会福祉協議会の地区担当とは緊密に連絡を取り合い、社協が立ち上げた居場所にも一緒に立ち寄るなど連携が進んでいます。

居場所で顔見知りになると、日常的にもつながる

・居場所で交流している人同士が顔見知りになることで、居場所に来ていないときでも、挨拶や声かけ、さりげない見守り、困ったときに助け合いができる行動につながっています。これは嬉しい成果です。

今後の展開

・第2層会議での「世代間交流の行事を育成会に働きかけよう」という提案を受けて昔遊びイベントを開催。地域の顔見知りが増えて挨拶運動や見守り活動へと展開しました。今後は、若い世代ともつながる活動にも取り組んでいきたいです。

昼間は福祉サロン、夜は居酒屋。一日中人が集まる地域の居場所



基本情報

名 称	ゆずり葉	開催日時	月・火・金・土・日 11:00～17:00
所 在 地	板橋区高島平 8-4-8	運営主体	NPO法人ゆずり葉
		開 所 日	2014年9月 NPO法人設立2017年9月

東京都板橋区 ※2021年4月板橋区資料より		板橋区高島平地区 ※2022年2月板橋区資料より	
人口: 570,024人 総世帯数: 317,322		人口: 49,396人 総世帯数: 29,089	
面積: 32.22km ² 人口密度: 17691.6人/km ²		面積: 4.9km ² 人口密度: 10,075人/km ²	
高齢化率: 23.87%		高齢化率: 30.73%	

こんな居場所

〔地域〕高島平団地入居時より自治会活動が盛んな地域

「ゆずり葉」がある板橋区高島平地区は、板橋区北部、荒川の南側に位置する地域です。1970年代に完成した高層集合住宅群である高島平団地がこのまちのシンボルです。

高島平団地の入居が始まった当初から自治会等の地縁団体が組織され、現在に至るまで多様な団体が活発に地域づくり・地域福祉に携わっています。

ここで長年電器店として地域の人たちと関係づくりをしてきた齊藤さんは、お客さんが高齢になる姿にこれまでお世話になった恩返しをしたいと、居場所づくりを考えました。しかし、居場所を維持するには運営資金が必要です。そこで、居酒屋の建物を活用し、夜は居酒屋営業、昼は地域の居場所運営という2本柱の活動を立ち上げました。

〔居場所の様子〕居酒屋のお客さんがサロン活動をサポート

ゆずり葉は、団地とは反対側の高島平駅西口北側を出て徒歩1分の商店街の中にあります。店舗正面には、窓を大きく開けたカウンターがあり、外から中の様子が見えるオープンなつくりです。中からも通りを行く人が見えて、「あとで来てね」などと声かけする様子も見られます。

週5日11時～17時のサロン活動を中心に、認知症カフェや筋トレ教室など様々な活動が展開されています。活動の中心は居場所のNPO代表齊藤さん。サロンが終わると居酒屋のママとして活躍します。

昼のサロン参加者がそのまま居酒屋で飲んだり、居酒屋のお客さんがサロンのお手伝いをしたりと、福祉サロンと居酒屋という2つの異なるシーンがあることで、人が人を呼ぶ居心地の良い居場所が実現しています。看板にあるキャッチフレーズのとおり「食べれる しゃべれる 集いの空間」です。

居場所運営団体の性質	NPO法人
	任意団体
	第2層協議体

拠点の性質	公共施設
	店舗／空き店舗
	自宅
	畑

生活支援コーディネーターの所属	第1層
	市役所
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	第2層
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	住民



「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

長年お世話になった地域に恩返しをしたい!を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

- ・20代の頃から家族が経営する高島平団地の電器店で働いていた齊藤さんは、電器製品の設置や故障の相談で、よく顧客の高齢者の家の中へ入ることがありました。そこで大事なものを何度もなくしたりする高齢者の様子を目の当たりにし、異変があったとき離れて暮らす家族に知らせるなどのサポートを行うようになりました。
- ・その後、東日本大震災の経験を経て、地域への恩返しをしたい気持ちから、板橋区主催のシニア世代コミュニティビジネス推進事業の勉強会に参加、2015年に居酒屋の店舗を活用した居場所活動を立ち上げました。

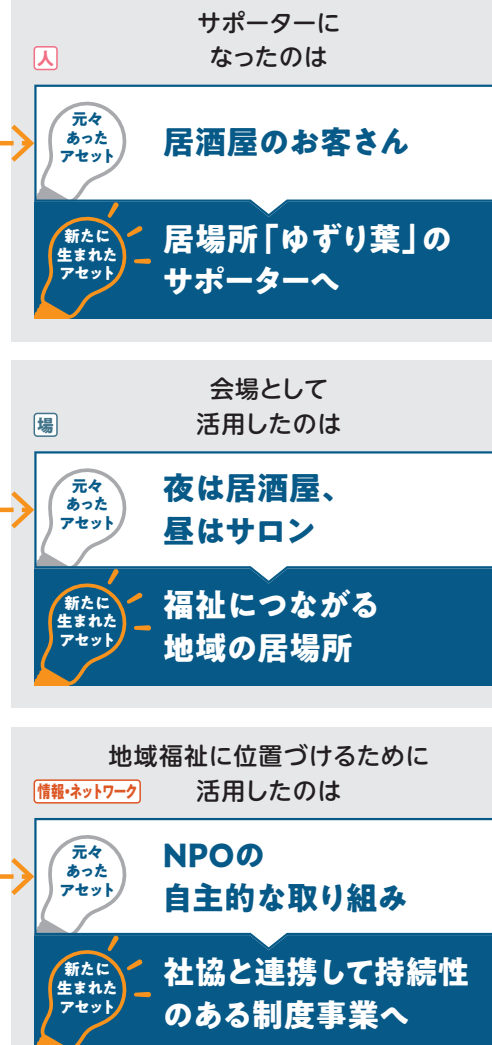
主な関係者

- NPO** NPO法人ゆずり葉代表
居酒屋「笑い処」ママ 齊藤さん
・実家は高島平団地の電器店。この地域に恩返しをしたいと居酒屋と居場所を立ち上げた。いたばし総合ボランティアセンター運営委員、(一社)国際箸学会理事。“感謝”と“笑顔”がモットー。
- 料理長** 「笑い処」料理長 加藤さん
・ホテルや一流料亭での経験がある。魚をさばくのが大好き。「笑い処」でのおすすめはラム肉料理。
- 住** サポーターたち
・居酒屋のお客さん、齊藤さんの電器店時代からの知り合い、現在に至るまでの取引先、地域の商店会。
- SC** 高島平地域担当第1層SC 小林さん
・齊藤さんが進める取り組みを「福祉の森サロン」や「認知症カフェ」などの制度につなげたり、利用者やボランティアの紹介などのサポートをしている。

カギとなるアセット

人
○運営者 ・NPO代表=居酒屋「笑い処」のママ ○ボランティア ・サロン参加者 ○協力者 ・板橋区、板橋区社協、都健康長寿医療センター研究所の専門職
場
○活動拠点 ★オープンで入りやすい居酒屋「笑い処」 ・ゆずり葉農園(ボラセンミニ農園)
モノ・資金
○助成金・補助金 ・福祉の森サロン(板橋区社協) ・通所型サービスB板橋区 ○委託費 ・東京都健康長寿医療センター研究所(農林水産省の研究費獲得) ○会費、寄付、食品提供
情報・ネットワーク
○高齢者の見守り情報 ・第2層協議体 ・NPO代表が長年行っている「卵の共同購入」(注文や受け渡し時にお困りごとを把握し声かけ) ・NPO代表の電器店時代の顧客、経験 ・ココからステーション(医療センターの出張所) ・板橋区おとしより保健福祉センター ○地域全般の人 ・活動に関する情報 ・地元の自治会や町会(自治意識が高く活動が活発) ・民生・児童委員 ○居場所への支援・情報交換 ★板橋区社協、いたばし総合ボランティアセンター ・サロンネットワーク(区社協主催)

3つのアセットにフォーカス



「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

・ゆずり葉の活動において齊藤さんは、新しい参加者が迷わないように、「指示を出すのも責任をとるのも自分」と考えています。その一方でとても「頼み上手」でもあります。ゆずり葉のホームページの作成や、口コミで人を呼ぶ、サロンや農園での手伝いや募金など、ゆず

り葉の活動の多くをサポートしているのは居酒屋「笑い処」のお客さんです。

・居酒屋のお客さんの様々なサポートに「ゆずり葉」の会員からの“ありがとう”があり、それが居酒屋のお客さんの心を動かすという循環ができています。

・入口の看板には「ゆずり葉」と「笑い処」が並び、ここは一体何の店？とちょっと気になる店の構えです。入口横の大きな窓からは中の様子が見え、老若男女誰でも入りやすいです。

・一見福祉とは遠い、お酒が並ぶ大人の居場所の雰囲気が、「福祉施

設はいやだ」という人も居心地よく過ごせる理由かもしれません。

・高齢者が語る成功談・失敗談が意外と若者の役に立ち、高齢者も若者をかわいがる立場を楽しんでいます。役割が自然に生まれています。

・ゆずり葉では、サロン、ランチ、都市型農福プログラム、生みたて卵の共同購入など、制度や助成とは関係なく齊藤さんが必要だと思う活動を発展させてきました。

・活動の様子を見た社協や区役所が制度の仕組みのなかに取り込みました。例えば「福祉の森サロン」

への登録や「認知症カフェ」立ち上げ支援、通所型サービスBの補助金などです。

・NPOとしての自主性を活かしながら、活動が効果的に持続できるよう社協や区役所、東京都健康長寿医療センターと連携しています。

事例から発想しよう！ 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう！

場所を 共有する人を ねらおう

- ・いつもと違うメンバーが集まりそうなイベントを企画してみてください。新しい人との交流が、次の活動を生み出すきっかけになるでしょう。
- ・また、その居場所をどんな団体が利用しているのかを調べ、お互いの活動に招待しあったりするのも良い方法です。同じ場所を活用していても、活動内容により違う雰囲気が生まれることもあり、それがまた新たな活動に興味を持つ動機になります。

こんな発想から考えよう！

福祉施設 ではない場所の 良さを 考える

- ・福祉を実現するためには、必ずしも“福祉施設らしい”デザインである必要はありません。一旦福祉から離れてその場所を捉えなおしてみると、その場所に集う人の心身の健康維持につながる良さを発見できるかもしれません。

こんな発想から考えよう！

最初の 「やりたい」 のために制度を 上手に活用

- ・ゆずり葉は、制度にあわせて立ち上げたのではなく、「こんな居場所が必要」と思って活動してきたものが、あとから制度に位置づけられてきました。
- ・制度や補助事業から考えると、「これは条件にあてはらない」と始める前からあきらめてしまうこともあるかもしれません。あくまで「やりたい」が先にあって、どうやったら支援できるか考えるという順番は大切です。



この事例から学ぶポイント

中島 智人

産業能率大学経営学部

「ゆずり葉」の事例から学ぶことができるポイントとして、まず、起業家的・企業家的姿勢の重要性を指摘したいと思います。ここでいう「起業家的姿勢」とは、地域の困りごとに着目し、それに対処するために新しい何かを始めることです。この事例では、代表である齊藤敦子さんが、起業家として、高島平という地域で、誰もが気軽に立ち寄れる地域に開かれた集いの場・通いの場を開設したということです。「企業家的姿勢」には、立ち上げた事業を事業体として継続させること、事業を経営すること、という意味を込めています。この事例では居場所経営、つまり通いの場「ゆずり葉」を継続して運営することです。

「誰でも」通い集う場とするためには、その場所が魅力的であるだけでなく、継続的な運営に必要なヒト・モノ・カネといった経営資源を、様々な方法で集めなければなりません。「ゆずり葉」では、ランチの売り上げのほか、立ち上げ時に認知症カフェとして区の補助金を受けたり、利用者に「会員」として会費や寄付を求めたりと、多様な資金を得ています(カネ)。また、利用者が他の利用者を気かけたり、利用者やゆずり葉の活動を支援したいと思う人たちの力を借りたりと、様々な人的ネットワークを活用しています(ヒト)。そして、夜は居酒屋となる場所を、昼に居場所として利用しています(モノ)。「ゆずり葉」の継続的な運営のための様々な方策は、福祉的な居場所の持続可能なビジネス・モデルとして、参考になるのではないのでしょうか。

次に指摘したいのは、生活支援コーディネーターの役割として、条件整備・環境整備の重要性です。この事例では、社会福祉協議会が担っている第1層生活支援コーディネーターの役割です。多くの第2層の生活支援コーディネーターを住民が担っている板橋区では、第2層SCを含めて住民主体の生活支援体制整備事業を進めるうえで、第1層SCの役割に特徴があります。印象的なのは、第1層SCの「ゆずり葉」のような地域活動を行う人たちに対する眼差しです。それは、齊藤さんや居場所に通い集う人たちの意志を尊重し、その人たちがそれぞれの想いを達成できるよう支援する、というものです。一定の水準を満たした一律の体制を整えるのではなく、地域の特性を受け入れて、「そこにあるもの」から住民主体で体制を作り上げるために、第1層のSCは住民が活動しやすいような条件・環境を整備する、という取り組みは、アセット重視の考え方そのものと言えるのではないのでしょうか。

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

板橋区

- 第1層 板橋区社会福祉協議会全域統括1名、区内4ブロック(板橋、上板橋、志村、赤塚)各1名、計5名を配置。
- 第2層 日常生活圏域18区域で第2層協議体が立ち上がっており、2層SCは協議体メンバーから選出されている。地域に根ざして継続して活動してもらうため、2層SCの半数以上は住民(民生・児童委員、自治会長など)。



担当SCからのメッセージ

アセット同士のネットワークづくりが、第1層SCの開発すべき資源

・高島平のような地域活動が活発な土地柄では、地域に既に多種多様なアセットが存在しています。既存アセットが豊富にある地域は、無理に新たな活動を創出するのではなく、既存アセットをいかに活用するかが大切です。各活動の「良いところ」と「良いところ」を掛け合わせていく考えです。月1回高齢者が集まるサロンもあれば、常設開催で多様な人が出入りする居場所もあります。どちらが優れているということではなく「一つ一つが宝物」ととらえ、それらをつなぎ合わせる場が、第2層協議体です。このネットワークを土台にアセット同士が互いに作用することで、今ある居場所の発展や新しい居場所の創出につながります。このネットワーク自体が、生活支援コーディネーターが開発するべき資源だと考えています。

「住民主体」は、「住民がしたい活動を主体的に展開すること」

・また、住民主体も大切です。住民主体とは「住民に主体的にやってもらうこと」ではなく、「住民がしたい活動を主体的に展開すること」だと思います。地域の「困り事」を、地域の「やりたい」で助ける。ありがたうの交換から、地域づくりの良い循環が生まれる。それが住民主体の活動になります。

・地域に隠れているアセットも必要なアセットも、専門職ではなくそこに暮らす地域住民が一番わかっていることです。それらの情報を収集把握し、つなぎ合わせるためにみんなで協議する。それが第2層協議体の理想形だと思っています。

07 こうせい親子`（おやじ）食堂

多世代型地域食堂

大阪府大阪市港区港晴

男性スタッフが活躍する、参加者が高齢者：子ども=6：4の多世代食堂



基本情報

名 称	こうせい親子`食堂	開催日時	第2土 11:00～14:00
所 在 地	大阪市港区港晴1-5-18 港晴会館 老人憩の家	運営主体	港晴地域活動協議会 有志
		開 所 日	2020年7月
大阪市港区 ※2020年国勢調査より 人口:80,948人 総世帯数:42,612 面積:7.86km ² 人口密度:10,298.7人/km ² 高齢化率:27.8%		大阪市港区港晴地区 ※2021年9月大阪市資料より 人口:4,512人 総世帯数:2,469 面積:0.41km ² 人口密度:11,004.8人/km ² 高齢化率:30.3%	

こんな居場所

〔地域〕地域のつながりが強く、住民の交流が活発な地域

こうせい親子`食堂がある大阪市港区は、ウォーターフロント開発などにより新しいまちのにぎわいがある一方、昔ながらの顔見知りが多く住民同士の交流が活発な下町情緒あふれる住宅街の一面もある地域です。神社の祭りやイベントが盛んで、地域と学校とのつながりも強く子どもの安全を守るための活動が育まれてきた土壌があります。

このような地域で、コロナ禍において、高齢者の引きこもりや子どもの孤食を心配する声が住民から上がったことをきっかけに、2020年7月、子どもから高齢者までが集う多世代食堂「こうせい親子`食堂」が立ち上がりました。

〔居場所の様子〕男性スタッフによる多世代食堂

「こうせい親子`食堂」は、毎月第2土曜日の11時から14時まで、地域のコミュニティ施設「港晴会館老人憩の家」で開催されています。ネーミングには、親子をはじめ多世代の人に来て欲しい気持ち、運営はおやじが担うという意気込みが込められています。

ある夏の日に訪ねると、野球の練習を終えた子どもたちや、近所で誘いあって来た高齢者など、たくさんの人で賑わっていました。今日のメニューはカレーライス。子どもは100円（就学前の児童は無料）、大人は200円で、誰でも食べることができます。用意した100食は、終了時刻前に完食になることもあるほどの人気です。

メニューは、大人にも満足してもらえるようカレーに甘口と辛口が用意される日があったり、「シチュー」や「から揚げとトン汁定食」など、バリエーションが増えています。

月1回の活動が日常の暮らしの中にも広がり、まちで子どもに会うと「カレーのおっちゃん」と声をかけてもらう関係づくりができて始めています。

居場所運営団体の性質	NPO法人
	任意団体
	第2層協議体

拠点の性質	公共施設
	店舗／空き店舗
	自宅
	畑

生活支援コーディネーターの所属	第1層
	市役所
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	第2層
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	住民



「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

コミュニティ施設「老人憩の家」で食事をしながら多世代交流がしたい！を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

- ・民生・児童委員の信野さんは、コロナ禍で、高齢者がひきこもりがちになったり、学校が休校になると子どもたちがさらに孤食を強いられたりするのではないかと、という危機感を感じ、「こんな時だからこそにかできないか」と考えました。
- ・「誰でも来られて交流ができる食堂を立ち上げたい」と信野さんが生活支援コーディネーターに相談したことがきっかけとなり、「こうせい親子食堂」を立ち上げることになりました。



民生・児童委員の信野さん

・地域活動協議会副会長等を務め、地域ネットワークが広い。



こうせい親子食堂代表 黒川さん

・前地域活動協議会(以下「地活協」)会長。自らの地活協会長時代に定年制を導入し、令和2年度末に退任。地域のお祭りやイベントには積極的に参加していて、男性の人脈も豊富。



生活支援コーディネーター(SC) 久保さん

・大阪市港区社会福祉協議会5年目、第1層SC活動歴3年目。
・前職は設計関係技術者。祖父の介護の際、人とつながる「ケアマネ」の仕事に興味をもち転職。



地域見守りコーディネーター 河本さん

・港晴地域を担当し、港晴会館に隣接する「港晴東会館老人憩の家」に常駐している。

主な関係者

用語

【地域活動協議会(地活協)】概ね小学校区を範囲として地域振興会(町内会)、社協、NPO、企業などで組織され、地域課題の解決やまちづくりに取り組んでいる(大阪市24区独自の仕組み)。

【地域見守りコーディネーター】おもに老人憩の家に常駐している相談支援員。地域住民の中から必要な知識やノウハウをもつ人が支援者として1名ずつ配置されている(大阪市港区社協独自の仕組み)。

カギとなるアセット

人

- 運営者／ボランティア
地域活動協議会有志、民生・児童委員、昔からの顔見知り
★大阪港カッターレースの仲間

場

- 高齢者の活動拠点
★高齢者のためのコミュニティ施設「老人憩の家」

モノ・資金

- 助成金
・大阪市ボランティア活動振興基金
- 食品提供
・大阪市社会福祉協議会
・こどもの居場所サポートおおさか(企業等からの食品提供をコーディネート)

情報・ネットワーク

- 地域全般の人・活動に関する情報
・地域活動協議会
- 高齢者の情報と利用紹介
・港区社会福祉協議会「見守り相談室」
★地域見守りコーディネーター
★地域包括支援センター／ランチ
- 子どもに関する情報
・港晴小学校(PTA、校長先生)
・地域子ども支援ネットワーク
- ボランティアになってくれそうな人のネットワーク
・神社の祭り
・港晴フェスタ(港晴小学校を会場に、地域活動協議会が主催)



3つのアセットにフォーカス

担い手に
なったのは



カッターレースチームの
仲間



こうせい親子食堂の
男性ボランティア

子どもも参加する多世代食堂の会場として
活用したのは



高齢者のための施設
「老人憩の家」



子どもも参加する
多世代食堂の拠点へ

居場所で介護予防を強化するために
活用したのは



地域見守りコーディネーター
地域包括支援センター／ランチ



こうせい親子食堂の
相談支援者

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

・民生・児童委員の信野さんは、常々地域でもっと男性に活躍してもらいたいと感じていました。立ち上げる活動は男性を中心に運営できるようにしたいと考え、前年度に地活協の会長を退任した黒川さんに声をかけました。

・黒川さんは、大阪港で行われるカッターレース(手漕ぎボート競技)にシルバーチームで参加しています。カッターレースのチーム仲間にも親子食堂への協力を呼びかけました。地活協の現会長で、小学校PTA会長の経験もあるチーム仲間が副代表になりました。

・港晴地域には老人憩の家が2つあります。「港晴東会館」では70歳以上を対象にした高齢者食事サービスの活動が行われていますが、「港晴会館」には食事提供の活動がなく、使われていない時間もありました。

・「港晴会館」は小学校のはす向かいにあり、子どもたちが来やすい場所でもあります。
・そこで、老人憩の家「港晴会館」を拠点として、高齢者も子どもも来やすい多世代食堂を行うことにしました。

・老人憩の家港晴会館に配置されている地域見守りコーディネーターの河本さんは活動日には必ず参加し、ボランティアメンバーと一緒に皿洗い等を手伝いながら参加している高齢者の相談にのったり、高齢者と子どもの世代間交流のつなぎ役として活躍してもらっています。顔見知りの河本さんがい

ることで初めての高齢者も参加しやすくなり、地域への周知も進んでいます。また地域包括支援センターとの連携も欠かせません。
・高齢者にとって、子どもと交流したり、歩いて来ること自体が介護予防になっています。

事例から発想しよう! 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう!

**楽しい
人間関係があれば
ボランティアも
楽しくできる**

・「地域活動への男性参加は少ない」という課題はよく聞きますが、「スポーツや趣味の仲間」がいる男性は多いことでしょう。
・公共主催のイベントやサークル、あるいは民間の様々な教室も含めて、糸口をさぐるのも良いかも知れません。

こんな発想から考えよう!

**高齢者+子どもが
参加する活動として
高齢者用施設
を活用**

・「高齢者のための」といった利用者を限定する施設もありますが、高齢者にプラスして子どもを参加者に位置づけて、多世代交流を実現している活動が近年増えています。「子どものためなら」という新しい協力者の獲得も期待できそうです。
・空き時間や空きスペースを地域貢献活動として貸し出す福祉施設も多くあります。

こんな発想から考えよう!

**居場所の
介護予防強化には
専門職との「つなぎ」
を考える**

・居場所でおしゃべりしているとポロツと困りごとが出るという話や、一緒に過ごす中で「いつもと様子が違う」と気づくことがあるという話を聞きます。
・専門職との連携は運営者・参加者双方にとって大きな安心感です。注意するポイントを居場所運営者と共有して、何かあったとき頼りになる関係をつくっておきましょう。



この事例から学ぶポイント

地縁組織の内と外、あるいは互助と共助が織りなす地域づくりがイメージできる事例だと思います。

『こうせい親子(おやじ)食堂』が立上り、多くの人に愛されるようになったのは、運営主体が地域活動協議会の中心メンバーでありながらも、地域活動協議会の中の活動にせず、独立した運営にした点が重要だと思います。特にコロナ禍の受け止め方が人によって大きく異なる状況であったことを振り返ると、なおさらだと思います。

訪問した際にまず印象に残っているのは、『ちょい悪おやじ』たちが楽しそうにしているなということでした。40、50代の現役世代の男性たちが活動に参加しているきっかけをうかがうと、カッターレース(大型手漕ぎボートのレース)の参加メンバーが中心になっているそうです。楽しんで活動をするということが、その場の魅力にも、活動の継続にも大切なことですが、あらためて実感させられました。

食堂だけでなく、2階を活用して子どもたちが遊べるようにするなど、活動を続けながら、楽しく発展しているようでした。地域の公園の掃除を定期的に行うようになるなど、建物の外を出て、地域全体の活動に広がっています。

中心メンバーの「おやじ」たちが楽しそうに取材陣とお話をされているなか、視界の先で洗い物をしながらこちらを見守っていたのが、仕掛け人の民生・児童委員の信野さんでした。この活動が幾重にもなって支えられている様子を感じました。

SCの久保さんは、日常的に出入りして、その都度必要な情報を伝えたりすることで、関係者たちと信頼関係を築いていっているようでした。地域活動協議会ですでに取り組みしてきた互助の活動と、その中心メンバーが別に取り組み互助の活動がうまく連続できていたのは、関係者たちの信頼とコミュニケーションがあったからこそだと思います。各地で広がっているこども食堂等の活動とSCが結びついていない地域が多く見受けられますが、多世代型の活動への支援としてSCの業務にしっかりと位置付けている点も重要です。

またSCの久保さんは、2021年度から住民主体の訪問型サービスのコーディネートも始まるようになっていきます。居場所の中で関係性が深まっていく中で、一人ひとりのニーズや家庭の様子がわかっていくこともあります。そのときに、「この人のお手伝いをしてもいいよ」という活動したいという気持ち、あるいは「この人になら話してもいい、手伝ってもらってもいい」と思えるような利用したいという気持ちを後押しする仕組みにもなります。日常的な助け合いの延長線上にある互助の取り組みと、よりシステム化された共助の取り組みがつながっていくような今後の展開にも期待していききたいと思います。

地域に様々なものがあることが大切ですが、それぞれの特性を理解することの大切さがよくわかるのではないのでしょうか。

隅田 耕史

NPO法人フェリスモンテ

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

大阪市港区

第1層 大阪市港区社会福祉協議会 1名(専任)

・全地域担当

第2層 大阪市港区社会福祉協議会

・11地域のうち、6地域(港区包括圏域)と5地域(港区南部包括圏域)に1名ずつ計2名(第2層の配置は令和3年度9月から)。



担当SCからのメッセージ

高齢者と子どもが集まる居場所の価値を実感

- ・高齢者にとっての「こうせい親子食堂」は、「子どもと接することができる」「歩いて来ること自体が介護予防になっている」など、他では得難い価値を生み出していることを実感しています。
- ・居場所に来ている子どもが、道でボランティアの男性たちと出会ったときに、楽しそうに「カレーのおっちゃん!」と気軽に声かけし合えるような関係づくりができたことも、とても嬉しく誇らしいです。
- ・地域のみなさんの熱意で、コロナ禍にあっても新たな居場所をつくることができたことに本当に感謝の気持ちで一杯です。

今後の展開

- ・高齢者と子どもの交流がもっと活発になるよう、次なる活動を住民の方と一緒に検討しています。
- ・1つは、食堂2階の部屋を学習支援や多世代の居場所(遊び場)として利用したいというアイデアです。学生などにボランティア層を広げ、子どもたちの学習支援や、昔遊びによる大人と子どもの交流をしていきたいです。
- ・また、公園の広場に畑を作り食堂用に野菜を育てるという構想も練っています。そのために必要な準備など、居場所やその他の関係各所と相談しながら検討中です。

08 ふれあい食堂 多世代型地域食堂

鳥取県鳥取市河原町渡一木

「地域の常夜灯になる」地域共生社会をめざす地域食堂



基本情報

名称 ふれあい食堂 開催日時 第4土 10:00~14:00
所在地 鳥取県鳥取市河原町渡一木277-1 運営主体 河原共助会
河原町コミュニティセンター大講堂 開所日 2020年9月

鳥取県鳥取市 ※2020年国勢調査より
人口: 188,465人 総世帯数: 77,029
面積: 765.3km² 人口密度: 246.3人/km²
高齢化率: 29.4%

鳥取市河原町 ※2020年国勢調査より
人口: 6,920人 総世帯数: 2,506
面積: 83.62km² 人口密度: 82.7人/km²
高齢化率: 38.38%

こんな居場所

【地域】古事記にも地名が登場する、早くから開けた地域

鳥取市河原町は鳥取県東部に位置し、早くから開けた地域で古代には因幡国八上郡の中心として栄えました。古事記にも地名が登場しています。2004年に8町村と鳥取市に編入合併されました。町の中心で二つの川が合流する自然の豊かな地域です。

鳥取市には、福祉推進主体として社協、地域包括支援センターの他に重要な機関として「人権福祉センター」があり、福祉活動の拠点として相談事業などを行っています。市全域を対象にした中央人権福祉センターと10の地域にセンターが設置されています。

中央人権福祉センターは2017年「鳥取市地域食堂ネットワーク」を創設し、子ども食堂・地域食堂の立ち上げと運営を支える支援を行っています。2019年に河原町人権福祉センター所長に着任した大門さんは、河原町でも子ども食堂を立ち上げる計画があったことを知り、すぐに試験開催を実施しました。試験開催で高齢者の参加が多かったことから「地域食堂」としての立ち上げを決め、食堂運営ボランティア団体「河原共助会」を組織、2020年9月に「ふれあい食堂」がスタートしました。

【居場所の様子】講堂で開催の地域食堂には高齢者から子どもまでが参加

毎月第4土曜日の10時~14時に開催される「ふれあい食堂」は、子どもに限らずに誰でも来られる「多世代食堂」です。会場は、河原町コミュニティセンターの大講堂。広々とした会場に、会議用の机を2台あわせて4人掛けにした上にテーブルクロスをひき、この島が12程作られると、最大50人が座れる食堂ができていきます。

参加費は子ども(高校生以下)無料、大人100円。この日のメニューは、クリームシチュー、麻婆豆腐、しらすのたまごとじ、つけあわせ、フルーツヨーグルト。栄養満点で満足度の高いメニューです。食前には、けん玉やコマ等の昔遊び体験のお楽しみや、学習支援も行っています。

居場所運営団体の性質	NPO法人
	任意団体
	第2層協議体

拠点の性質	公共施設
	店舗／空き店舗
	自宅
	畑

生活支援コーディネーターの所属	第1層
	市役所
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	第2層
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	住民



「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

計画はあったが行われていなかった「地域食堂」を、「試験開催」として実現した取り組みについて、アセットの活用に注目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

- ・地域食堂の試験開催をしてみると子ども以外の高齢者等のニーズも高いことが分かり、大門さんは子どもを中心に誰でも参加できる「ゆるくて居心地のよい小さな空間」をコンセプトとした多世代交流の地域の居場所をつくろうと考えました。
- ・大門さんがめざしたのは、人権福祉センターを核に、市社協SC、児童館、地域包括支援センター、人権擁護委員、民生・児童委員、学校など町内の様々な機関と連携し、相談やプラットフォームの機能がある地域食堂です。

主な関係者



河原人権福祉センター所長 大門さん

- ・2019年に河原人権福祉センター所長に着任。ふれあい食堂立ち上げにあたり、児童館、学校、社協、地域包括など様々な機関に声をかけ連携を呼びかけた。



河原共助会のメンバー

- ・地域住民や民生・児童委員、児童館厚生員、福祉活動関係者が参加している。



第2層生活支援コーディネーター 西尾さん

- ・鳥取市社会福祉協議会8年目、第2層SC活動歴4年目。
- ・元々社協職員で、子育てで一時職場を離れていたが復職。河原共助会の一員として活動に参加。

カギとなるアセット

人

○運営ボランティア

★河原共助会
(地域住民／民生・児童委員／
児童館厚生員／人権擁護委員／
地域包括支援センター職員／社会福祉協議会職員／
河原人権福祉センター職員 など)

○特技がある人

★手話通訳ができる人

場

○地域食堂の会場

・河原町コミュニティセンター大講堂

モノ・資金

○食材提供

★NHKの取材を見た企業からの食材寄付
・道の駅清流茶屋かわはら
・NPO法人和貴の郷
・マルサンアイ(株)

情報・ネットワーク

○鳥取市内の地域食堂に関するネットワーク

★地域食堂ネットワーク

・鳥取市

○大学生ボランティア

・ユリイカ

○子どもに関する情報

★小学校／中学校／保育園

○ふれあい食堂のPR

・児童館だよりに掲載

・NHKの取材



3つのアセットに
フォーカス



担い手に
なったのは



意欲のある
住民や関係者



「河原共助会」
メンバー



中間支援として
活用したのは



鳥取市
地域食堂ネットワーク



運営サポートや
寄付食品のシェア



子どもが参加しやすくなるために
活用したのは



小・中学校の
校長先生



子ども参加の
プログラムの立案

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

- ・立ち上げる前の試験開催に参加し、積極的に関わってくれた住民や包括職員・民生・児童委員・児童館厚生員・SCに所長が声をかけ、食堂の調理や会場設営、企画を行うボランティアグループ「河原共助会」を結成しました。
- ・困難を抱える人のアウトリーチの

場とするためには相談対応ができる人が必要です。民生・児童委員や社協、SCにも加わり、手話通訳者も参加してくれることになりました。

- ・参加する人みんなに役割がある食堂です。調理には90代の人や、ろう者も参加しています。

- ・「鳥取市地域食堂ネットワーク」に加盟して、食品の寄贈やコロナ禍での運営についての情報共有、寄付金の分配などの支援を受けています。
- ・鳥取大学のサークル「ユリイカ」もネットワークの構成団体です。遊

びや調理のボランティアとして「ふれあい食堂」へも毎回学生が参加しています。

- ・NHKでふれあい食堂が取り上げられたことをきっかけに、地元の弁当会社や食品メーカーからの寄付もありました。

- ・小学校校長に子どもに参加してもらうための相談をすることもあります。構想段階ですが「モノづくり教室」のアイデアなどが出ています。

- ・中学校校長は食堂に毎回参加、中学生が職場体験としてふれあい食堂に参加する計画も進みそうです。

事例から発想しよう！ 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう！

どの立場で 参加するかを 考える

- ・居場所や地域食堂の運営に、住民と一緒に行政職員や公的機関の職員、民間事業者など多様な人が関わる場合があります。そんなときは例えば「社協職員として居場所づくりに携わっておりますが、本日は一児の母で地域住民として参加します」など宣言してしまうのもオススメです。一市民として地域の人と同じ目線で参加するうちに信頼関係も生まれますし、「仕事」として支援する場面もきっとあります。

こんな発想から考えよう！

「こんな支援 あったらいいな」を 整理しておく

- ・多くの企業がCSR活動に取り組んでいます。SDGsの観点から、地域の活動に支援する動きも増えています。
- ・また、支援内容を明確に伝えた方が、企業も支援がしやすいようです。どんな支援が必要か整理しておく、いざというときに対応しやすいでしょう。

こんな発想から考えよう！

学校に通う 子どもや孫、 卒業生関係者から 広げてみる

- ・子どもの参加には、学校との連携が大切です。活動メンバーが子どもたちと顔見知りになることで、子どもも安心して参加でき、なにかあった際には学校に相談ができるからです。
- ・直接学校に連携について訪ねるのもいいですが、地域活動メンバーに学校に通う子どもや、卒業生でも学校とつながりがある人はいないか聞き、その人と一緒に訪ねていく方がスムーズです。



この事例から学ぶポイント

河原ふれあい食堂は毎月数十人の地域住民が集まる食堂を開催し、バラエティ豊かな献立と昔遊びや学習支援によって老若男女が楽しく過ごせる居場所を提供しています。この活動は様々なアセットにより成り立っていますが、その中でもとくに重要な位置を占めるのが「鳥取市地域食堂ネットワーク」という仕組みです。子どもの問題が顕在化する中で市内の民間団体と行政が子ども食堂の活動を始めたことをきっかけとして2017年に設立された地域食堂ネットワークは、現在40団体以上の地域食堂の運営と支援を行っています。ネットワークでは地域食堂を「子どもを中心に地域の様々な人が集う居場所、多様な人や社会資源がつながる場」と位置づけ、地域食堂が継続的・安定的に運営を行うための仕組みづくりを行い、地域共生社会をめざす活動を行っています。具体的には、企業から受けた寄付金・食材を集約し各食堂団体へ分配したり、学生ボランティアグループと連携してボランティアを派遣したりする他、情報交換会等の情報共有を精力的に行っています。

このようなモノや情報の支援を受けることで、河原ふれあい食堂は安定的に活動を継続することができており、多様な人の出会い・ふれあいのプラットフォームとなっているのです。私たちが食堂に訪問したときに目に入ったのは、感染症対策のパーテーションを挟んで賑やかにおしゃべりする高齢者、少し離れた距離で手話で会話するボランティアと聴覚障害のある方、調理ボランティアとして参加している市内の大学生、おもちゃで遊ぶ幼児等様々な方が一つの会場で思い思いに過ごしている様子でした。河原では昔と比べて子どもがずいぶん減ったけれど食堂は高齢者が子どもたちと触れ合えるいい機会になっている、と児童館に勤め食堂の運営を行う佃さんがおっしゃっていましたが、確かに大学生に調理を教えたり、子どもに昔遊びを教える高齢者の生き生きとした姿が印象的でした。また、大門さんを中心に様々なアイデアを出し、まずは試験的に実施してみる!という河原ふれあい食堂の行動力もまた素晴らしいと感じました。最近では、地域の医師に相談して病院にきた引きこもりがちな高齢者に”処方箋”としてふれあい食堂を勧めてもらう事はできないかと構想していて、高齢者の孤立・孤独に対する社会的処方の取り組みを始めようとしているそうです。

河原ふれあい食堂がしなやかな共生の場として活動を継続させ、さらにその活動の幅を広げていることは、地域食堂ネットワーク・鳥取市、SCを始めとした専門職、そしてボランティアに参加する住民の方々といった関係者が地域食堂のもつ意義や地域づくりのビジョンを共有しながら連携できていることが大きなカギとなっていると言えるでしょう。

(事務局)

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

鳥取市

第1層SC 鳥取市社会福祉協議会 1名(専任)

第2層SC 鳥取市社会福祉協議会 7名(専任)

・2層圏域は市内に41地区あり、地区ごとに担当がいる。

SC

担当SCからのメッセージ

居場所に関わることで地域を知り、つなぎ役へ

・SCになりたての頃は、地域や関係機関とのつながりができておらず、どこに相談して良いか分からなかったため孤立感がありましたが、ふれあい食堂に関わるようになり、様々な機関や地域住民を「知る」ことができ、今ではつなぎ役として関わられるようになりました。

3つのポイント

・SCとして大切にしている3つのポイントがあります。

・1つ目は「知ること」です。

地域を「知る」、地域活動を「知る」、地域の人材を「知る」ことです。知ることが「つなぎ役」への第一歩です。

・2つ目は「人脈づくり」です。

人と人との信頼関係があってこそ「つなぐ」ことができます。

・3つ目は「気づくこと」です。

気づきの視点が増えていけば「つなぎ役」としての視野が広がります。

今後の展開

・2021年12月、河原町で第2層協議体が立上りました。各関係機関や地域住民の「つなぎ役」として、地域課題を検討していく取り組みが始まったところです。

09 畑活プロジェクト「はっぴい農園」

畑作業で交流

奈良県葛城市笛吹

コロナ禍でも密にならない活動を探して実現「畑活プロジェクト」



基本情報

名称 畑活プロジェクト「はっぴい農園」 運営主体 新庄セブンつながり
所在地 奈良県葛城市笛吹546-1 レンジャー(第2層協議体)
開催日時 土 午前中 開所日 2020年11月

奈良県葛城市 ※2020年国勢調査より 葛城市新庄中学校区 ※2022年3月住民基本台帳より
人口:36,832人 総世帯数:13,288 人口:21,560人 総世帯数:8,739
面積:33.72km² 人口密度:1,092.3人/km² 高齢化率:26.9%
高齢化率:28.2%

こんな居場所

〔地域〕市街地と山地・丘陵地が半々の地域

「はっぴい農園」がある奈良県葛城市は、2004年(H16)旧新庄町と旧當麻町の2町が奈良県内初の合併により誕生した市で、地図を見ると市街地と山地・丘陵地帯がちょうど半々のエリアです。京都・大阪方面への鉄道や車によるアクセスが便利で、医療費助成などの子育て環境に惹かれての転入者も多いです。

「はっぴい農園」を運営するのは、2018年に結成された新庄中学校区第2層協議体「新庄セブンつながりレンジャー」です。協議体が行った住民ニーズアンケートから浮かび上がった生活課題は「居場所」「生活支援」「移動」の3つ。まずはつながりづくりの場をつくろうと、居場所づくりに取り組むことを決めた矢先にコロナ禍に突入、どんな活動ならできるのかを議論して出てきたのが居場所として畑を使うというアイデアでした。

〔居場所の様子〕耕作放棄地を居場所として再生

2020年11月から始まった「畑活プロジェクト」は、毎週1回土曜日の午前中に「はっぴい農園」に集まり、農作業をする活動です。耕作放棄地を畑に変えて、季節に合わせて苗の植え付け、栽培、収穫など一連の農作業を行っています。

参加者は運営を担う協議体メンバー5人も含めて10人ほどです。また、はっぴい農園は「デイサービスセンター笛吹」の裏にあり、通所者が畑に顔を出し、元気に指導してくれることもあります。「歩くのがやっとなような高齢者でも、鍬を持つとしゃんとする」「認知症でコミュニケーションが難しいと思っていた人でも、元農家の経験から作業のアドバイスしてくれた」と、畑の効果を実感しています。

収穫できた野菜は畑活参加者で分け合うだけでなく、高齢者向けの配食サービスに提供しています。今後は市内で活動している子ども食堂の食材として使ってもらおう計画もあり、輪が広がっています。

居場所運営団体の性質	NPO法人
	任意団体
	第2層協議体

拠点の性質	公共施設
	店舗／空き店舗
	自宅
	畑

生活支援コーディネーターの所属	第1層
	市役所
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	第2層
	社会福祉協議会
	地域包括支援センター
	NPO法人
	住民



「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

コロナ禍でも密にならない活動として実現した「畑活プロジェクト」を、アセットの活用に注目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

- ・住民アンケートで、地域には「手助けがほしい人」「ボランティアをしたい人」両方がいることが分かりました。出会いの場があれば解決することがあるかもと、まず出会いの場を立ち上げることにしました。
- ・居場所づくりという目標ができてまもなくコロナ禍に突入。畑を生きがいとしている元気高齢者をみていたことから、密にならない屋外の「畑」を居場所とするアイデアが生まれ、取り組みに向けた準備が始まりました。

主な関係者



第2層生活支援コーディネーター(SC)

田口さん

- ・葛城市社会福祉協議会24年目、第2層SC活動歴4年目。介護福祉士、主任介護支援専門員、ケアマネージャー。
- ・通所介護勤務8年、居宅介護支援事業所12年の後、SCとして協議体立ち上げから関わる。



第2層生活支援コーディネーター(SC)

大山さん

- ・葛城市社会福祉協議会20年目。第1層SC活動歴7年目。社会福祉士。
- ・2002年から地域福祉を担当し、生活支援体制整備事業に当初から関わっている。



新庄地域の第2層協議体

「新庄セブンつながりレンジャー」のメンバー

- ・2017年2月に葛城市社協主催住民フォーラム「みんなでつくる助け合いのまち」で、活動に興味があると手を挙げた人たち。

カギとなるアセット

人

- 運営者
 - ・新庄セブンつながりレンジャー(第2層協議体)
- 協力者
 - ★トラクターを所有する民生・児童委員
- 畑活参加者
 - ★デイサービス通所者
 - ・地域の親子
 - ・農業経験者
 - ・ラジオ体操後に畑に寄る子ども

場

- 畑活を行う居場所(農地)
 - ★デイサービス所有の耕作放棄地
 - ・第2の畑(近くで夏休みはラジオ体操が実施されている)

モノ・資金

- 畑の収穫物
 - ・配食サービスの食材に提供

情報・ネットワーク

- 地域ケア会議
 - ・地域貢献活動を行う、裏に畑を所有するデイサービス事業所などに出会う場
- 地域のつながりづくり
 - ★住民フォーラム「みんなでつくる助け合いのまち」
 - ・傾聴や認知症カフェボランティア
- 畑活プロジェクトのイメージづくり
 - ・早朝から畑で交流する高齢者
 - ・鎌を持って元気に畑に向かう高齢者



3つのアセットに
フォーカス



畑の先生に
なったのは



民生・児童委員、
デイサービス通所者など



農作業を教えてくれる人
農作業が好きな人



畑活の場として
活用したのは



デイサービス所有の
耕作放棄地



コロナ禍でも
集まれる拠点



運営主体確立に
活用したのは



3回の研修会



やる気のある
第2層協議体

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

- ・「コロナで行き場がないけど畑があるから助かっている」といった会話や、畑仕事は「認知症の人が生き生きするよ」といったアドバイスから畑活のアイデアは生まれました。
- ・「新庄セブンつながりレンジャー」メンバーには農業経験がなかったた

め、畑がある地区で農業を営んでいる民生・児童委員に協力を仰いだところ、耕作放棄地をトラクターで耕運してくれました。

- ・畑で作業をしていると「こうするとい

- ・SCの田口さんは、デイサービス管理者から使っていない畑を地域貢献で使えないか、という相談を受けていました。畑活プロジェクトでの活用を打診したところ、無償で貸してもらえることになりました。農具置き場や水も使わせてもらっています。

- ・デイサービスの通所利用者が畑に出てきて活動に参加することもあります。認知症の利用者さんが農業の経験を教えてくれることもあります。

- ・第2層協議体メンバーは充て職ではなく、自主的に参加を決めた人たちであることがポイントです。あえて「フォーラムに参加して3回の研修を受けた人」というハードルを設けました。
- ・住民のやる気が継続するにはSCの

サポートは欠かせません。説明会や収穫イベントの運営、害獣よけの柵づくりなどのサポートに協議体メンバーからの信頼は厚く、意思疎通しやすい関係が築けています。

事例から発想しよう！ 我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう！

「あったらいいな」
を伝える

- ・「こんな居場所、あったらいいな」と思ったら、まずは誰かに伝えてみましょう。長年知っている人でも、どんな趣味や特技、人のネットワークがあるかは知らないことが多いです。「それだったら手伝えるよ」と協力が得られたり、「それなら〇〇さんを紹介しようか」と情報が得られたりするかも知れません。
- ・知っているつもりの人意外な一面を発掘していく気持ちで、どんどん伝えてみましょう。

こんな発想から考えよう！

「気になっている」
ことを伝える

- ・「ここの空き店舗、所有者さん誰かな？」「ここの畑、借りることできないかな？」など、気になることがあったら、「あったらいいな」同様、なにかと機会を見つけては話題に出してみましょう。畑活プロジェクトのように、お互いが「出会えて良かった」と思える状況に「いつ」なるかはわからないのですが、動かなければ始まりません。常にアンテナをはっておくことが大切です。

こんな発想から考えよう！

活動の趣旨を
共有する

- ・運営母体や居場所を立ち上げる際は、活動の主旨を伝えて確認し、それに賛同してくれる人が集まるのが大切です。例えばあるコミュニティ農園では、「個人が農作業を楽しむだけでなく、みんなの行う農作業が農園主を支援することになり、地域の緑や食の確保に貢献する」主旨を伝え、賛同する人に参加してもらいました。共通の理解をもった上でスタートさせることで、活動は活性化していくことでしょう。



この事例から学ぶポイント

清水 洋行

千葉大学大学院人文科学研究院

畑活プロジェクトでは、意欲ある住民による小さな集団が起点となり、地域資源を活用したアセットを組み合わせる新たな取り組みをつくり、それがさらに別の地域資源をアセットとして組み合わせながら…という、雪だるま式にアセットがつながっていくプロセスがよくわかります。プロセスが進むにつれて、いろいろな出番が生まれ、住民たちがそれぞれのかたちで参加できる居場所になっていきます。このプロセスの最初のアセットは、意欲のある住民たちの小さな集団です。ここでは第2層協議体メンバーである新庄セブンつながりレンジャー（以下、レンジャー）同士のつながりです。そして、レンジャーのメンバーが、この地域の日常の生活の一部である畑仕事が、住民同士のコミュニケーションを生み出す場であることに気づき、畑を使った居場所づくり向かうことから最初のアセットに別のアセットがつながり始めます。

まずはデイサービスセンターの畑、続いて畑のある地区に住む農家の方です。畑はその土地が、農家の方はその農作業のスキルが、それぞれアセットとなります。この畑や農家の方は、いずれもSCがレンジャーたちに紹介した地域資源です。これらは、SCが所属する社協の地域福祉活動などを通じて知っていた地域資源です。活動を通じて思わぬかたちでアセットとなった地域資源もありました。「杖を鋤に持ち替えて」参加するだけでなく、畑作業のやり方を他の参加者たちに教えてくれるようになったデイサービスの利用者さんたちです。眠っていた経験が引き出され、畑仕事のノウハウというアセットとなりました。住民向け説明会の開催場所となった神社は地域の中心的な場所で、地域の人々が親しみを抱いていて集まりやすいところでした。つまり、境内やトイレがアセットとなっただけでなく、神社がもっている雰囲気も、地域の人を引き寄せるアセットとなったといえるでしょう。

最後に、ポイントを3つあげます。1つめは、各々の地域資源は、いろいろな点で居場所づくりに役立ち、様々なアセットとして活用されるということです。例えばデイサービスセンター自体も地域資源ですが、そのうちの畑は活動場所として、利用者さんたちの経験は畑仕事のノウハウとして、それぞれアセットとなっています。2つめは、アセットを組み合わせることが大切で、それによって新しい取り組みが生まれてくることです。3つめは、この新しい取り組みは予期せぬ方向に展開するということです。生活支援コーディネーターの大切な役割の一つは、この雪だるま式に進むプロセスが生活支援体制整備事業から脱線しないよう気を付けつつ、新たな地域資源と橋渡しすることといえるでしょう。

(主な参考文献) Snow, Luther K. The Power of Asset Mapping: How your Congregation Can Act on Its Gifts. (2004)

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

葛城市

第1層SC 1名 葛城市社協、社協の地域福祉担当と兼務

第2層SC 1名 葛城市社協、社協の介護保険担当と兼務

※便宜的に階層ごとに担当を分けているが、行動や情報共有は1層2層区別なく行っている。

・二つの中学校区圏域(新庄・白鷗)に協議体が設置され、2人のSCが2圏域に関わっている。



担当SCからのメッセージ

居場所への関わり方

- ・協議体を立ち上げるためのフォーラム開催時から、協議体設立、居場所運営まで一貫して並走してきました。介護予防に結びつくような居場所になるように、「さりげなくサポート」しています。そのために、あえて居場所とは距離をおくように心がけています。メディア対応が必要なときは立ち会うようにしていますが、普段の活動に首を突っ込みすぎないようにしています。
- ・その理由は、「社協の施策を住民が手伝っている」ではなく、「自分たちがやりたいことをやっている」にしたいからです。現在、居場所づくりをしている協議体のメンバーはとてもやりがいを感じているので、それはSCにとっても喜びとなっています。

今後の展開

- ・「はっぴい農園」は現在農作業に重きが置かれていますが、居場所として集える場所にしていきたいとの思いが、協議体メンバーにもあります。
- ・また、「はっぴい農園」第2の畑も誕生しています。第2の畑の近くでは夏休みにラジオ体操が行われており、終了後の小学生が参加するなど広がりをみせています。このような居場所づくりを、市内全域へ展開していきたいです。

岩手県花巻市の「高松第三行政区ふるさと地域協議会」は、過疎化・高齢化・一人暮らし世帯増の危機感が増す地域で、農福連携を中心にした事業を行い、地域の活性化に取り組んでいます。

住民主体の介護予防の取り組みや資源の活用に学ぶところが多いため参考事例として掲載します。



名称 高松第三行政区ふるさと地域協議会

開所日 2008年6月

花巻市 ※2020年国勢調査より
人口:94,676人
総世帯数:37,979
面積:908km²
人口密度:104人/km²
高齢化率:34%

花巻市矢沢コミュニティ ※2020年国勢調査より
人口:7,725人
総世帯数:37,979(高松第三行政区の人口:167人)
面積:36.95km²
人口密度:209人/km²
高齢化率:35.7%(高松第三行政区:46.7%)

こんな居場所

【地域】アクセスはよいが、高齢化、過疎化、一人暮らし世帯増

花巻市高松第三行政区は花巻市の東南部に位置し、東北新幹線新花巻駅まで車で10分、花巻空港まで15分と交通の便は良いものの過疎化高齢化が進み(高齢化率46.7%)、一人暮らし世帯や高齢者のみの世帯が48.48%の中山間地域です。地域では高齢化による生活課題の他にも、農業の担い手不足など多くの課題を抱えていました。

2008年、「このままでは限界集落になってしまう」と危機感を抱いた6人が発起人になり、全世帯参加の「ふるさと地域協議会」が設立されました。

協議会は2011年、岩手県立大学の協力を得て「農業・福祉・交流を連携させた地域の活性化」を目指して住民手づくりの「ふるさと交流福祉計画」を策定。農福連携の活動が始まりました。

【居場所の様子】福祉農園や貸し農園での交流や、6次産業化で生きがい創出

居場所として最も近い活動は、遊休農地を活用した福祉農園(5,000m²)と貸し農園(1,000m²)での、作業・収穫・交流です。

福祉農園は将来「ケアファーム(青空デイサービス)をめざした取り組みで、里山に自生しているガマズミやナツハゼなどの木の実を栽培し、収穫した木の実を6次産業化によりゼリーに加工・販売。地域の高齢者の雇用や生きがいを創出しています。

貸し農園は地域内外の人たちが交流をしながら自家菜園として利用しています。ここでも交流と生きがいづくりが生まれています。

その他にも生活支援活動として高齢者の見回り、外出支援、配食サービス、除雪を行っており、住民全員が「みんなが主役、みんなで実践」をモットーとした地域づくりが展開されています。



地域の活性化に活用したアセット

課題認識と活動の経緯

- ・地区の集会等で人口減少や高齢化が話題になり、住民は「このままでは限界集落になるのではないか」と不安を持っていました。
- ・危機感を持った有志6人が自主的な勉強会を行い、課題を共有していきました。
- ・行政区内の全世帯を会員にした「高松第三行政区ふるさと地域協議会」が立ち上がりましたが、当初は試行錯誤の連続でした。
- ・岩手県立大学の指導を得て2011年「ふるさと交流福祉計画」を策定、さらに2019年には岩手県立大学と連携団体(9団体)との協力の下「農村板地域包括ケアシステム構築ビジョン」を策定しました。

取り組み概要と「活用した主な助成金

活動の概要

○福祉農園

- ・居場所として最も近い活動は、遊休農地を活用した福祉農園(5,000㎡)です。農園では、高齢者、障がい者、子どもが作業・収穫・交流ができ、将来は「介護予防・日常生活支援総合事業」を活用した「ケアファーム」としての運営を展望しています。
- ・農園には、もともと地域の里山に自生しているガマズミとナツハゼを植栽。アイデアは住民参加のワークショップで出されたものです。収穫した実はゼリーに加工・販売する6次産業化へ発展し、作業する高齢者(70～80才代)に賃金を払うことで、雇用と生きがい創出につながりました。



○貸し農園

- ・面積は1,000㎡で17区画があります。利用者は地区外8割、地区内2割です。1シーズン(4～11月)1区画1,000円の利用料で、仮設トイレや作業用の鍬なども備え付けられています。利用者の中から野菜の先生になってくれる人も現れ、やりがいと交流が広がっています。

○生活支援

- ・福祉農園で収穫・加工されたものは、配食サービスの食材にも使われています。現在、1～3月の週1回、10個を高齢者に無料で配布しています。
- ・外出支援は、2016～2017年の社会実験を経て、2018年から花巻市介護予防・日常生活支援総合事業(総合事業)の「訪問型サービスB」により本格実施しています。総合事業の対象に該当しない方の利用が課題でしたが、農水省「中山間地域等直接支払制度・集落機能強化加算」を活用することにより解決しています。

活用した主な助成金

○助成金

- ・農林水産省「農山漁村地域力発掘支援モデル事業」
- ・農林水産省「農山漁村振興交付金」
- ・厚生労働省「高齢者生きがい活動促進事業」
- ・ニッセイ財団「高齢社会地域福祉チャレンジ助成金」

○移送支援の車両購入

- ・花巻市「高齢者生きがい就労創出支援事業」



この事例から学ぶポイント

原田 晃樹

立教大学コミュニティ福祉学部

カギとなるアセット

人

- 運営者
 - ・集落の全住民(ふるさと地域協議会に参加)
 - ・会長、役員、事務局長
 - ・協議会設立の6人の仲間たち(前行政区長、市議会議員等からなる)
- 農園管理者
 - ・地域の70代男女10人ほどの雇用されている人
- 集落に活気をもたらす人
 - ・移住してきた10世帯の人たち

場

- 交流拠点(福祉農園、貸し農園)
- ・遊休農地活用

モノ・資金

- 畑の収穫物
- 6次産業の材料
 - ・里山に自生していたナツハゼやガマズミの実
- 助成金
 - ・農林水産省「農山漁村地域力発掘支援モデル事業」
 - ・農林水産省農山漁村振興交付金
 - ・厚生労働省「高齢者生きがい活動促進事業」
 - ・ニッセイ財団「高齢社会地域福祉チャレンジ助成金」
- 移送支援の車両購入
 - ・花巻市長寿福祉課の高齢者の生きがいづくり

情報・ネットワーク

- 福祉農園で交流を呼びかけるネットワーク
 - ・子ども園
 - ・障害者施設
- 「高松第三行政区ふるさと交流福祉計画」策定・実施の協力者
 - ★岩手大学社会福祉学部
 - ・花巻市／地域包括支援センター／社協／JAいわて花巻／矢沢保育園

高松第三行政区ふるさと地域協議会は、2008年に全住民を会員として発足しました。地縁コミュニティを基盤に置けていますが、地区の将来に危機感を抱いた有志6人が地道に地区住民に働きかけて設立しており、既存の活動とは独立した運営がなされています。

協議会ではふるさとづくり計画を定めており、そこでは「農業」「福祉」「交流」を活動の柱としています。活動内容は、遊休農地を活用した貸農園の運営、地域に親しまれた産品を活かした加工品の開発・販売、高齢者のデイサービスや障害者施設との共同による高松福祉農園の運営、農園での作業や収穫を通じた交流会、独居高齢者等への配食、足を持たない人への移送サービスなど多岐にわたります。

協議会の運営には、活動に持続性を持たせるための様々な工夫が施されています。第一に、多くの住民が運営に参加しやすい環境づくりにつとめていることです。例えば、加工品の試作品づくりでは多くの住民に参加してもらいますが、試食会の際、人気のない(手がつけられない)試作品があればスタッフがさりげなく下げるというように、参加する側の気持ちに立った対応が行き届いています。

第二に、「農業」「福祉」「交流」という目的が、実際の活動では各々有機的につながっていることです。農園での活動が、障害者、健常者、子ども、高齢者、学生、さらには移住者も参加しやすい交流の場になり、収穫物は加工品や配食の原材料になります。活動の場面ごとに支援する・される立場は入れ替わります。そうした関係が、個々人のエンパワメントにつながっているだけでなく、交流が進む中で地域の隠れた課題も把握しやすくなり、生活課題支援の事業化にもつながっています。

第三に、公的資源を有効に使っていることです。協議会は、各省庁・自治体・JAから様々な交付金・助成金を受けており、地域の主要団体から日常的に有形無形の支援も受けています。公的団体の支援は分野別の縦割りが大半であり、それらが地域で活かされるには現場でのアレンジが不可欠ですが、縦割りの支援を受けることで、暗黙のうちに自分たちの活動を規定してしまいがちです。制度や利用可能な資源を熟知し、それらを自分たちが必要とする支援に結びつける協議会の手腕は卓越しています。

高松第三地区の取り組みは、生活支援体制整備事業としての活動ではありませんが、個々の事業に多くの資源を投入できない農山村地域にとって、生活支援のひとつのモデルを示しているといえるかもしれません。

「事例から発想しよう！我が町アセット活用のヒント」一覧

01～09の事例で紹介した「こんな発想から考えよう」を、5つのカテゴリーに分けて整理しました。

詳細は各事例ページをご覧ください。

① 担い手について

目的と作業内容を明確にすることで関わりやすくなる人もいる
みんなで特技や好きなことをシェアしてみる
特技が活かされると楽しく参加できる
場所を共有する人をねらおう
どの立場で参加するかを考える

事例01 すまいる向陽台

東京都稲城市向陽台(P13)上段

事例03 喫茶わくわく

大阪府泉南郡岬町淡輪(P21)上段

事例05 カフェいしださんち

東京都稲城市平尾(P29)上段

事例06 ゆずり葉

東京都板橋区高島平(P33)上段

事例08 ふれあい食堂

鳥取県鳥取市河原町渡一木(P41)上段

② 組織の運営について

すでにある資源の活用を考える
まずは話し合いや活動の「場」をつくってみる
誘い文句になるような特徴を考える
まずはできることから動いてみる
「お墨付き」を活用する
「こんな支援あったらいいな」を整理しておく
活動の趣旨を共有する

事例01 すまいる向陽台

東京都稲城市向陽台(P13)中段

事例02 かふえまんでサロン

香川県高松市香南町横井(P17)上段

事例02 かふえまんでサロン

香川県高松市香南町横井(P17)中段

事例03 喫茶わくわく

大阪府泉南郡岬町淡輪(P21)中段

事例04 やまもりいこいの家

愛知県知多市岡田(P25)下段

事例08 ふれあい食堂

鳥取県鳥取市河原町渡一木(P41)中段

事例09 畑活プロジェクト「はっぴい農園」

奈良県葛城市笛吹(P45)下段

③ 拠点について

公共施設の上手な活用方法を探る
空き店舗を長く安定して活用することを考える
民有地でもみんなで集まれる場所はある
福祉施設ではない場所の良さを考える
高齢者+子どもが参加する活動として高齢者用施設を活用
「気になっている」ことを伝える

事例02 かふえまんでサロン
事例04 やまもりいこいの家
事例05 カフェいしださんち
事例06 ゆずり葉
事例07 こうせい親子`（おやじ）食堂
事例09 畑活プロジェクト「はっぴい農園」

香川県高松市香南町横井（P17）下段
愛知県知多市岡田（P25）中段
東京都稲城市平尾（P29）中段
東京都板橋区高島平（P33）中段
大阪府大阪市港区港晴（P37）上段
奈良県葛城市笛吹（P45）中段

④ 地域ネットワークについて

我が町や隣町の活動を調べてみる
地域に参加できる会がないか調べてみる
楽しい人間関係があればボランティアも楽しくできる
学校に通う子どもや孫、卒業生関係者から広げてみる
「あったらいいな」を伝える

事例03 喫茶わくわく
事例04 やまもりいこいの家
事例07 こうせい親子`（おやじ）食堂
事例08 ふれあい食堂
事例09 畑活プロジェクト「はっぴい農園」

大阪府泉南郡岬町淡輪（P21）下段
愛知県知多市岡田（P25）上段
大阪府大阪市港区港晴（P37）下段
鳥取県鳥取市河原町渡一木（P41）下段
奈良県葛城市笛吹（P45）上段

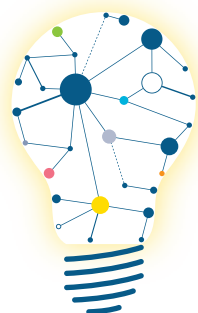
⑤ 介護予防の強化

居場所の介護予防強化には商店街との「つながり」も有効
居場所の介護予防強化には専門職との「つながり」を考える
最初の「やりたい」のために制度を上手に活用
居場所の介護予防強化には専門職との「つながり」を考える

事例01 すまいる向陽台
事例05 カフェいしださんち
事例06 ゆずり葉
事例07 こうせい親子`（おやじ）食堂

東京都稲城市向陽台（P13）下段
東京都稲城市平尾（P29）下段
東京都板橋区高島平（P33）下段
大阪府大阪市港区港晴（P37）中段

やってみよう。



アセット発見で、
居場所の「やりたい!」を
かなえるワーク。

10の事例から、住民自身がつもつ強みや既にある様々な地域資源を活かした活動の展開を見てきました。

これまで思いつかなかったような小さなアセットも、組み合わせたりつなげたりすることで、新たな価値が生まれることがお分かりいただけましたか。

アセットの捉え方や活用が理解できたら、ワークショップで担当する地域での居場所の立ち上げや展開の構想づくりをしてみましょう。

このワークの ねらい

このワークのねらいは、次の2点です。

- ①生活支援コーディネーターと地域住民や関係者（行政 / 社会福祉協議会 / 地域包括支援センター / NPO 等の担当者）とが地域の課題や活動の展開について共有し、議論できる場をつくります。

このワークをきっかけに、地域で連携して居場所づくりを進めていくチームづくりにつながることを期待しています。

- ②他の活動や他の地域の生活支援コーディネーターや住民と意見交換を行います。

いつも話し合う仲間とは違う視点を持った人の意見を聞くことで、居場所の立ち上げや展開に対して、柔軟な発想や多様なアイデアを得ることができること、また、地域の課題解決や居場所活動の活性化のための具体的な対応方法について構想することがねらいです。このワークをきっかけに、新たに発見したアセットを活かして、実際の居場所の開発・継続支援を行うことにつながることを期待しています。

このワークの 特徴

居場所で「こんなことやりたい！」をイメージして、その内容を語りあいながら実現に向けて考えます。

●やりたいから考える

- ・実現できるかできないかはちょっと脇に置いて、「こんな居場所をやってみたい」を書き出すことから始めます。わくわくする気持ちでイメージしてください。
- ・決して「やらねばならない」から考えないでください。「やらねばならない」は、「やらせる方」も「やらさせる方」も負担を感じて、良いアイデアが浮かびません。
- ・「やりたい」から考えることで、我が事として考え積極的に取り組む気持ちを引き出します。

●語りあう

- ・このワークは、1人ではなく複数の人と一緒に考えることを基本としています。地域住民、行政職員、生活支援コーディネーター、社会福祉協議会、地域包括支援センター等の専門職といった、できるだけ立場の違う人の参加があると理想的です。
- ・立場が違えば経験や知識が違い、その違いが発想の幅を広げることにつながります。1人では煮詰まってしまうことも、立場の違う人と語りあうことで、「この役割しかない」と決めつけていた資源に、新しいアセットとしての価値を発見することでしょう。

ワークの進め方

STEP 1

プログラム

チーム内ワーク 20分

- ・居場所に関して「やってみたいこと」を書き出して共有しよう。
- ・活用できそうな地域のアセットを書き出して共有しよう。

使用するシート

STEP 2

グループワーク 60分

- ・STEP1で話し合ったことを共有しよう。
- ・「やってみたいこと」を実現するためのアイデアを出し合おう。

STEP 3

チーム内ワーク 15分

- ・STEP2で話し合われたアイデアを参考にして、今後取り組むことをチームで考えよう。

参加者

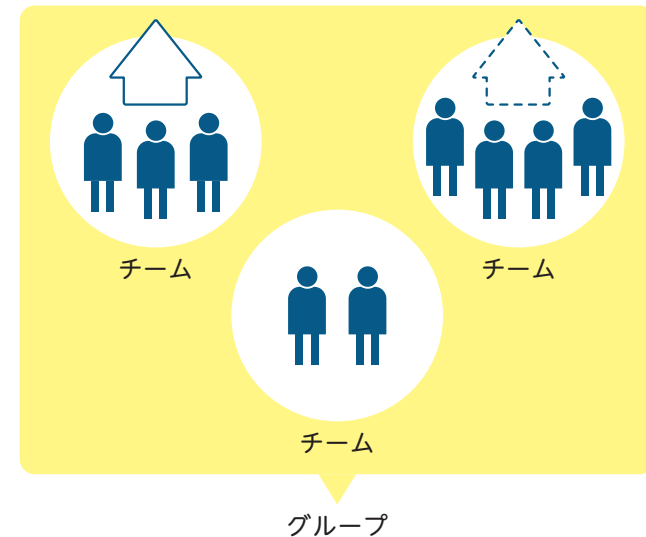
このワークでは、「チーム」と「グループ」という2つの呼び方をします。

チーム

- ・同じ居場所で活動をしている人たち。
あるいは、これから同じ居場所で活動しようとしている人たち。
- ・1チーム2～4人程度が運営しやすい。1人でも参加可能。

グループ

- ・上記のチームが複数集まったもの。
- ・2～4グループ程度が運営しやすい。



①1チームで行う場合

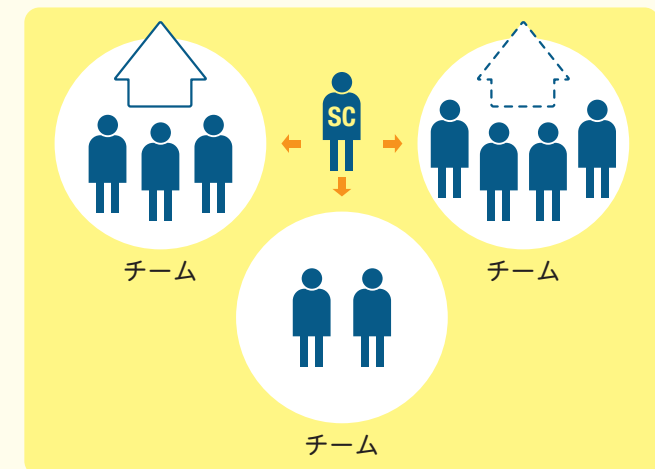
- ・3つのステップ全てを同じチーム(人)で行います。

②2チーム以上で行う場合

- ・左ページのプログラムをご覧ください。
- ・STEP1とSTEP3は、各チーム内で行います。
- ・STEP2のみ、全チームが集合してグループとなって行います。

※チームが複数あり、同一人物が複数の活動に関わっている場合は、参加人数等を配慮してどのチームに入るか決めてください。

※生活支援コーディネーター等の専門職は、複数の活動に関わっていることが想定されます。
STEP1とSTEP3では、関わっている団体をあちこち見て回ってください。



STEP 1

チーム内ワーク

作業①

- ・各参加者が、居場所でやってみたことを考えます。
- ・自分が参加している立場の枠内に書きます。

ポイント 「できない」「他の人はどう思うかな」を一旦忘れて、自分の気持ちや考えを素直に書きましょう。



STEP 1 作業①②用ワークシート 居場所の「やりたい!」をかなえよう。

あなたのまちにどんな居場所が欲しいですか？
「こんな居場所があったらいいな」を書き出しましょう。

住民の立場から

SCの立場から

左記の内容の中から、このワークで考えたい「次にやってみよう」[課題に感じていること]を話し合ってください。

チーム A

作業②

- ・各参加者の内容を発表します。
- ・お互いの意見を聞きながら「どんな居場所をめざすか」を話し合い、書き出します。

ポイント 各々の意見を聞いた後、共通する考えを確認し、全員が「やってみよう」と思える居場所を考えます。

作業③

- ・作業1-2で書いた内容を実現するために、活用できるアセットはないか、下記のカテゴリーに分けて考えます。

人／場／モノ・資源／
情報・ネットワーク

ポイント 4つのカテゴリー全てに書けなくても、1～2コでも大丈夫。

STEP 1 作業③用ワークシート 居場所の「やりたい!」をかなえよう。

居場所実現のために活用できそうなアセットを書き出しましょう。

人

場

モノ・資金

情報・ネットワーク

チーム A

注) 住民の方が2人参加していたら、空欄に「住民の立場から」を作ってください。他の立場の方も同様です。

ここまで20分。
時間になったら終了。
続いて、各チームが集合してグループになります。

STEP 2

グループワーク

作業

- ・チームが集まってグループになります。
- ・各チームから、STEP1で考えた内容をシートを見せながら発表します。
- ・他のチームは、発表内容について質問したりアイデアを出したりします。
- ・出されたアイデアは、各チームのSTEP2のシートに記録します。



STEP 2 ワークシート

居場所の「やりたい!」をかなえよう。

居場所の実現に向けて
アセットを使ったアイデアを出し合ひましょう。



ポイント 成功例や失敗例、参考になりそうなアイデアを自由に出してください。3チームなら1チーム20分、2チームなら1チーム30分。1チームの時間内で、発表とアイデア出しをします。

3チームで行う場合の時間割り例

時間	チームA	チームB	チームC
0:05	発表		
0:15	記録	アイデア出し	アイデア出し
0:05		発表	
0:15	アイデア出し	記録	アイデア出し
0:05			発表
0:15	アイデア出し	記録	アイデア出し

各チームの持ち時間が来たら、次のチームに交代します。

STEP 3

チーム内ワーク

作業

- ・各チームの作業です。
- ・STEP2で出されたアイデアを参考に、居場所の実現に向けてどこから取り組むかを考え、シートに記載します。

STEP 3 ワークシート

居場所の「やりたい!」をかなえよう。

出たアイデアを参考に
実現のために今後取り組むことを考えましょう。

最後のまとめは15分。
実現に向けて、次のステップは見えただか？
ここで考えたことを、活動メンバーにも共有して、具体的な活動に活かしてください！

STEP 1

作業①②用ワークシート

居場所の「やりたい!」をかなえよう。

あなたのまちにどんな居場所が欲しいですか？
「こんな居場所があったらいいな」を書き出しましょう。

住民の立場から

SCの立場から

左記の内容の中から、このワークで考えたい[次にやってみたいこと][課題に感じていること]を話し合って記載してください。

STEP 1

作業③用ワークシート

居場所の「やりたい!」をかなえよう。

居場所実現のために活用できそうな
アセットを書き出しましょう。

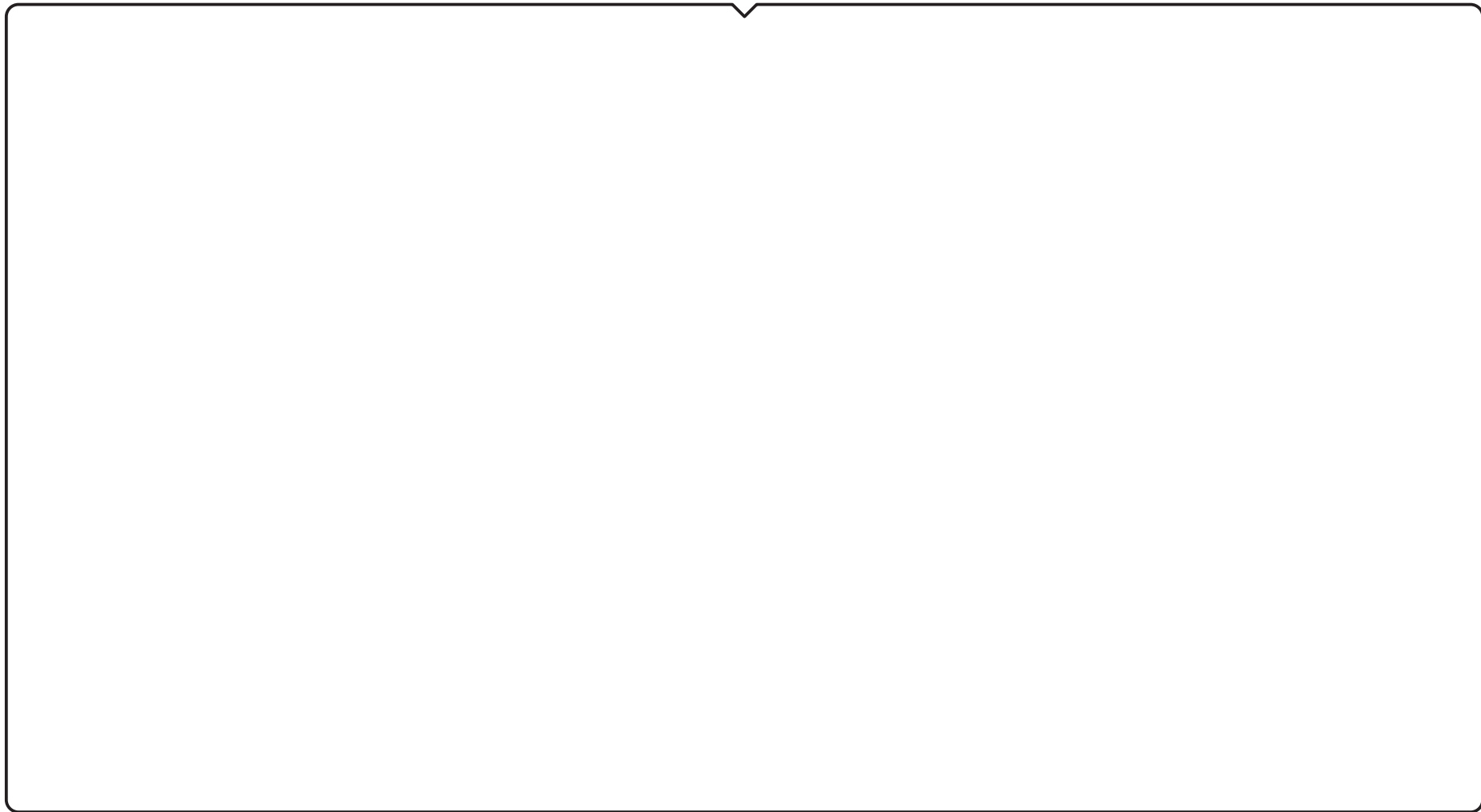


モノ・資金



情報・ネットワーク

居場所の実現に向けて
アセットを使ったアイデアを出し合いましょう。



出たアイデアを参考に
実現のために今後取り組むことを考えましょう。

ワークショップを「創造的」にすすめるために

講師が一方的に知識を提供する、いわゆる座学の講義型研修に対して、参加者同士の意見交換やディスカッションの時間を大切にするワークショップという研修形態は、日本の社会福祉の研修プログラムにおいてもすっかり定着してきたといえます。知識・情報のインプットで終わってしまう講義に比べて、インプットした知識や情報を自分の経験や考えに照らし合わせて検討し、検討した結果を他者と共有し、他者の意見を聞き、他者からフィードバックをもらうことで、新たな考え方やものの見方を得ることができるという点が一般的にワークショップの良いところと考えられています。講義で得られた知識や情報が実践に反映される割合は必ずしも高いものとはいえませんが、ワークショップを通して見えてきた自分の新しい考え方や、ワークショップの過程で生み出された新たなアイデアは、実践に反映される可能性が高くなりますし、知識と情報の定着率も一方的な講義に比べて高いといわれています。

しかし、ワークショップ形式にすれば自動的に学びが深まるかという点、必ずしもそうとは限りません。実施形態はワークショップであったとしても、自由な発想で創造的な意見交換ができなければワークショップをする意味はあまりないかもしれません。むしろ、講義型研修のような体系的な知識と情報を得ることもできず、ほとんど得るものがないまま、すなわちインプットがないまま、アウトプットだけを求められても、いつもの発想でいつもの考えを述べて終わってしまうということもあります。ワークショップという学びの形態を用いるのであれば、いつもとは異なる発想でいつもと異なる考えに至ることが期待されます。

では、どのようにワークショップを設計すると自由な発想で創造的な意見交換ができるでしょうか。効果的なのは固定観念をリセットするような問いを参加者に投げかけることです。例えば、地域共生社会における地域づくりの方法について参加者みんなで創造的に検討することを目的に開催されるワークショップの場合、本題に入る前に、そもそも地域共生社会は本当に望ましいものなのか参加者に検討してもらうような機会を設けることが効果的かもしれません。

地域共生社会や地域包括ケアの実現、生活困窮者の自立、孤立の解消といった考え方は近年、国が推進している施策であり、社会のあり方として否定されるものではないので、ワークショップで議論をするときなど、そうした考え方を前提に議論することが少なくありま

せん。しかし、その時点ですでに自由な発想を妨げてしまい、思考に枠組みを設けてしまっているのです。

地域共生社会を実現するために、地域の中でどのような助け合いの仕組みを作ることができるかというようなテーマで意見交換をすると、身近なアセットを探して、それらを結びつける方法について様々なアイデアが出てくるかもしれません。しかし、地域活動に関わる住民は本当に地域共生社会を求めているのでしょうか。おそらくワークショップで出てくるアイデアは地域共生社会に対して前向きな住民の関与を前提とした考えになりますが、その時点で、とても狭く限定的な発想に基づいて議論してしまっているといえます。そこで、例えば、「あなた自身は地域共生社会を本当に求めていますか」というような質問を投げかけて意見交換をしてもらうとします。具体的には、「地域の見守り活動に参加することで、自分のプライベートの時間を犠牲にしなければいけないとします。それでもあなたは地域活動に参加しますか」というような質問について自分目線で考えを述べてもらうと、自分のプライベートの時間は守りたいという声意外と多いことに驚くかもしれません。仮にそのように地域共生社会に対して後ろ向きなコメントが出てきたときに、はじめて前提となる枠組みを外すことができるでしょう。

「地域共生社会は実は多くの人にとっては望ましいものではないかもしれない」という考えや、「地域共生社会の実現がうまくいかないときに、我々の生活はどのような局面を迎えるのか」というような発想が芽生えてきます。そのような発想に立ち返ったときに、「それなら地域共生社会の推進はもっとこうならないといけない」というように前提を凌駕する自由で創造的な発想が湧き上がってくるでしょう。

こうした思考法をクリティカル・シンキングといったりしますが、そうした思考を導き出すためのクリティカルな問いを投げかけることがワークショップの設計にとって重要になります。ワークショップの主催者やファシリテーターは、国の法制度や福祉の基盤となる考え方などに対して常に批判的な視点を持ち、さらには自分の視点や価値観に対しても疑いの目を向け続けることが求められます。

室田 信一

東京都立大学人文社会学部

**新型コロナウイルス影響下における
生活支援体制整備事業の推進に向けた
人材育成に関する調査研究事業**

【研究委員会】

(委員長)

内藤 佳津雄 日本大学文理学部 教授

(委 員)

秋山 由美子 特定非営利活動法人 日本地域福祉研究所 理事

荒井 崇宏 稲城市福祉部高齢福祉課高齢福祉係 係長

石田 惇子 一般社団法人全国食支援活動協力会 代表理事

石橋 智昭 公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団 主席研究員

日下 直和 社会福祉法人香川県社会福祉協議会 事務局長

清水 洋行 千葉大学大学院人文科学研究院 教授

祐成 保志 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

隅田 耕史 特定非営利活動法人フェリスモンテ 事務局長

高橋 良太 社会福祉法人全国社会福祉協議会地域福祉部 部長

中島 智人 産業能率大学経営学部 教授

原田 晃樹 立教大学コミュニティ福祉学部 教授

平野 覚治 一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事

室田 信一 東京都立大学人文社会学部 准教授

目崎 智恵子 高崎市第1層生活支援コーディネーター
主管課高崎市福祉部長寿社会課

【ワーキング部会】

(部会長)

平野 覚治 一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事

(委 員)

荒井 崇宏 稲城市福祉部高齢福祉課高齢福祉係 係長

清水 洋行 千葉大学大学院人文科学研究院 教授

祐成 保志 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

中島 智人 産業能率大学経営学部 教授

原田 晃樹 立教大学コミュニティ福祉学部 教授

目崎 智恵子 高崎市第1層生活支援コーディネーター
主管課高崎市福祉部長寿社会課

令和3年度 厚生労働省老人保健健康増進等事業
新型コロナウイルス影響下における
生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業

事例でわかる

地域アセット活用ガイドブック

生活支援コーディネーターの居場所づくり・つながりづくりを応援

一般社団法人 全国食支援活動協力会 編

ガイドブック編集チーム

伊藤浩巳・小泉愛佳・岩寄いづみ(一般社団法人 全国食支援活動協力会)

宮地成子(場所づくり研究所 有限会社プレイス)

デザイン カタヤナギユウイチ

一般社団法人 全国食支援活動協力会

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀6-19-21

TEL 03-5426-2547 <https://www.mow.jp/>

発行日 2022年3月30日

